

## 〔七二〕内翰蘇軾

内翰蘇軾、宿東林日、與照覺總禪師論無情話、有省。黎明獻偈曰、溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身。夜來四萬八千偈、他日如何舉似人。

\*

内翰蘇軾、東林に宿るの日、照覺總禪師と無情の話を論じて、省有り。黎明に偈を獻じて曰く、「溪聲は便ち是れ廣長舌、山色は豈に清淨身に非ざらんや。夜來四萬八千偈、他日如何が人に舉似せん」。

\*

内大臣の蘇軾は、(廬山の)東林寺に宿をとつて、照覺の(常)総禪師に向つて、無情(説法)のことを議論して、ハタと氣付くところがあった。

明くる朝、(次のような)偈を獻じた。

谷川の水の音は、(ブツダの)いつわりのないおしゃべり、

山の姿も(大日如来の)法身ならぬはない。

昨夜からの(私の耳にきこえている)、四万八千の(經の)偈文を、

これから先、どのように人々に説明したものか（とても説明しきれはしない）。

\*

○内翰Ⅱ宋代、翰林学士をいう。「唐の玄宗は即位して間もなく、宮中に翰林院を設け、芸能や技術にすぐれたさまざまな人物をかかえた。そして開元二十六年には、翰林院の南に学士院を新設し、これを翰林学士院とよんだ。ここには秀れた文学の士を集め、ときには詔勅の起草をさせるだけにして優遇した。かれらは、詔勅の起草にたずさわるうち、しだいに詔勅のうちの大事なものは正規の中書舎人をさしおいて、翰林学士が起草するようになり、翰林学士は内職とよばれる重要なポストとなった」。礪波護「唐の官制と官職」（小川環樹編『唐代の詩人』所録）参照。宋代には執政に昇進する重要な職となり、内相・内翰と呼ばれた。『事物紀原』卷四「法從清望部」の内翰の項にいう、「唐百官志に曰く、開元二十六年、翰林供奉を改めて學士と爲し、別に學士院を置く。其の後、選用益重され、號して内相と爲す。又た陸贄伝に『贄は翰林に入り、外に宰相有りて大議を主どると雖も、贄は常に中に居りて、可否を參裁し、時に内相と號さる』と。則ち是の稱は陸贄より始まるなり。此れ由り今亦た翰林學士を呼びて内相と爲し、亦た内翰と曰う」。

○蘇軾Ⅱ一〇三六—一一〇一。宋の景祐三年（一〇三六）二月十九日、四川省眉山県に生まれる。字は子瞻、号して東坡居士という。宋詩の第一人者。唐宋八大家の一人であり、またそれに数えられる蘇洵（一〇〇九—一〇六六）は父であり、蘇轍（一一〇三—一一二二）は弟である。

嘉祐元年（一〇五六）、父、弟とともに都にのぼり、二十二歳のとき進士となり、監督官であった歐陽修（一〇〇七

一〇七二)を師と仰ぐ。熙寧三年(一〇七〇)王安石(一〇二一—一〇八六)が宰相となり「新法」を實行するにおよんで、それに反対したことで、四年(一〇七二)に地方に転出し、神宗の崩御、哲宗の即位(一〇八五年)まで政治的に不遇の時代をすごすが、詩はますます自由奔放となり、詩壇においてゆるぎない地位を獲得する。元豊二年(一〇七九)、詩が天子を誹謗しているとされ、首都に送られ御史台の牢獄に投ぜられた。三年(一〇八〇)に黃州(湖北省黃岡県)に流刑となる。元豊七年(一〇八四)減刑され、行動の自由を得る。東林寺に宿したのはまさにこの時期で、筠州(江西省高安県)―南京―揚州―常州(江蘇省)と旅行したときのことである。哲宗が即位し、祖母の皇太后が摂政となると、中央に呼びもどされ、中書舎人から翰林学士となる。皇太后の亡により政局は変転し、新法党が復活し、紹聖元年(一〇九四)惠州(広東省恵陽県)に流刑され、ついで海南島に移された。建中靖国元年(一一〇一)ゆるされて、提拳玉局観となり、北に帰る途中、江蘇省の常州で卒す。年六十六であった。南宋の乾道六年(一一七〇)に孝宗皇帝より文忠と諡を賜わる。『宋代伝記資料索引五』四三二―二頁以下に伝記に関する資料が網羅されている。仏教側の資料としては、『嘉泰普灯録』卷三三、『五灯会元』卷一七の灯史や、時代は下がるが、『居士分灯録』卷下、『仏法金湯篇』卷二二、『先覚宗乘』卷三、『居士伝』卷二六等の居士の列伝類に略伝と問答語句を録している。また宋代禅門の随筆にも散見する(石井修道「十一種宋代禅門随筆集人名索引(下)」参照のこと)。

○東林 江西省九江県の南、廬山にある東林寺のこと。慧遠(三三四―四一六)は、太元六年(三八一)に同門の慧永(三三三―四一四)に迎えられて廬山西林寺に入る。太元十一年(三八六)に江州の刺史であった桓伊が、慧遠のために西林寺の近くに寺を新築した。これが東林寺である。慧遠が白蓮社を結んだため、この地は浄土教の根本道場となる。後、廬山には天台智顛(五三八―五九七)、四祖道信(五八〇―六五二)などが留錫し、唐代には馬祖に嗣い

だ帰宗智常が住した。宋代になって、黄龍慧南に嗣いだ常総が東林寺に入り、律寺を禪寺に改めて化を振り、蘇東坡、周濂溪、張商英らの士大夫がその下に参じた。『廬山志』卷二に東林寺の勝蹟がまとめて収録されている。

○照覺總禪師一〇二五—一〇九一。名は常総、俗姓は施氏。延平尤溪（福建省尤溪县）の人。黄龍慧南に嗣ぐ。十一歳のとき、本郡の宝雲寺文兆に依りて出家した。弱冠に及んで試経得度し、建州大中寺の契思律師に到って具足戒を受けた。初め吉州禾山の楚材禪智に参じ、厚遇されたが留まらず、慧南禪師の風を聞いて帰宗寺に参じたが、所得がなく一旦立ち去った。帰宗寺の火災（一〇四九年へ余靖撰「廬山承天帰宗禪寺重修記」『武漢集』卷七）により、南公が石門の南塔に移ったことを聞き再び参じた。黄檗積翠庵さらに黄龍山へ移つても行きて従い、二十一年間に七度往返した。南公の卒した翌年の熙寧三年（一〇七〇）、洪州太守の榮諲（一〇〇七—一〇七二）の請により泐潭に住し、弊壊していた堂や殿を十年かけて復興し、数百の禅徒が集まった。元豊三年（一〇八〇）、詔により東林律居を禅席に革めるに当って、九江太守の李昭遠、洪州太守の王韶（一〇三〇—一〇八二）の引き立てによって住持となり、「七百年後、当に肉身の居士有って、茲の地を改剏せん」という慧遠大師の遺記が現実となった。元豊六年（一〇八三）、大相国寺智海禅院への入寺の詔が下ったが固辞し、李端愨の奏により紫衣と広惠大師の号を賜わった。また元祐三年（一〇八八）、徐国王の奏により昭覺禪師の号を賜う。元祐六年（一〇九二）九月二十九日示寂、世寿六十七、坐夏は四十九。元祐七年（一〇九二）に書かれた黄裳（一〇四四—一一三〇）撰の「昭覺禪師行状」（『演山集』卷三四）が伝記の第一資料であるが、年紀に二・三の不注意なミスが目立つ。『禅林僧宝伝』卷二四は、それを訂正するものとなる。他に『続灯録』卷二二、『五灯会元』卷一七等に略伝と問答語句を録す。

○無情話Ⅱ南陽慧忠（？—七七五）の無情説法のこと。洞山良价は、これを問題にし、滄山、雲巖に問いただし、悟りの最初の手がかりとなった。この無情説法は後世に大きな影響を与えている。

歴史的に見れば、『涅槃經』の「一切衆生悉有佛性」が有情の世界に限られているのに対して、中国では、地論宗の淨影寺慧遠（五三三—五九二）や三論宗の吉藏（五四九—六三三）などによって無情有仏性説が起ってくる。禪宗では道信・弘忍の頃、この仏性問題に対して有仏性説の立場を取る。神会や大珠慧海のように無仏性説の立場に立つ人もいたが、慧忠は大胆にこれを取り入れ、さらに無情説法にまで推し進めた。八世紀中々末頃に牛頭系の人の手になるとされる『達摩和尚絶観論』も有仏性の立場に立つ。『祖堂集』卷三・慧忠章、同卷五・雲巖章、『伝灯録』卷二八・慧忠広語、同卷一五・洞山章、『宗門統要』卷二・慧忠章、『洞山録』などに無情説法の話が見えるが、洞山を中心にして慧忠、滄山、雲巖の話の一つにうまくまとめてある『洞山録』のものを次に挙げておく。

次に滄山に參じ、問うて云く、「頃ろ南陽忠國師にへ無情説法の話有りと聞く、某甲未だ其の微を究めず」。滄山云く、「闍黎、記得する莫きや」。師（洞山）云く、「記得す」。滄山云く、「汝試みに擧すこと一遍し看よ」。師遂して擧す。「僧問う、「如何なるか是れ古佛心」。國師云く、「牆壁瓦礫是れなり」。僧云く、「牆壁瓦礫は豈に是れ無情ならずや」。國師云く、「是なり」。僧云く、「還た解く説法するや」。國師云く、「常に説き、熾然として説きて間歇する無し」。僧云く、「某甲は爲甚麼に聞かずや」。國師云く、「汝自ら聞かず、他の聞くを妨ぐべからず」。僧云く、「未審甚麼人か聞くを得ん」。國師云く、「諸聖聞くを得たり」。僧云く、「和尚は還た聞かや」。國師云く、「我は聞かず」。僧云く、「和尚既に聞かざるに、争でか無情の解く法を説くを知らん」。國師云く、「頼に我れ聞かず。我れ若し聞かば即ち諸聖に齊し。汝即ち我が説法を聞かざるなり」。僧云く、「恁麼なれば則ち衆生には分無きに去らん」。國師云く、「我れ衆生の爲に説き、諸聖の爲に説くにあらず」。僧云く、「衆生聞きて後は如何」。國師云く、「即ち衆生に非ず」。僧云く、「へ無情説法」は何の典教にか據る」。國師云く、「灼然、言の典を該ざるは、君子の談ずる所に非ず。汝豈に見かずや、華嚴經

に云く、刹説しやくてき、衆生説き、三世一切説くと」。師學し了る。瀉山云く、「我が這裏にも亦た有り。祇だ是れ其の人に遇うこと罕なり」。師云く、「某甲未だ明らめず、師の指示を乞う」。瀉山、拂子を豎起して云く、「會すや」。師云く、「會せず、請う師説け」。瀉山云く、「父母生みし所の口は終なんじに子が爲に説かず」。師云く、「還た師と同時に道を慕いし者有りや」。瀉山云く、「此より濃陵攸縣けいけんに去くに、石室相い連なり、雲嚴道人有り。若し能く撥草瞻風すれば必ず子の重ずる所と爲らん」。……師遂に瀉山を辭し、徑いたまち雲嚴に造り、前の因縁を擧し了り、便ち問う、「へ無情説法むじやうせつぽう」は甚麼人か聞くを得ん」。雲嚴云く、「我れ若し聞かば、汝は即ち吾が説法を聞かざるなり」。師云く、「某甲爲甚麼なにゆゑに聞かざる」。雲嚴、拂子を豎起して云く、「還た聞かや」。師云く、「聞かず」。雲嚴云く、「我れ法を説くすら汝は尚お聞かず、豈に況んやへ無情説法むじやうせつぽう」をや」。師云く、「へ無情説法むじやうせつぽう」は何の典教てんきやうに諒そなう」。雲嚴云く、「豈に見みかずや、彌陀經みだつしやうに云く、水鳥樹林悉く皆な佛を念じ法を念ず、と」。師は此に於て省有り。乃ち偈を述べて云く、「也大奇、也大奇、無情の説法不思議なり。若し耳を將て聽かば終に會し難く、眼處に聲を聞きて方めて知るを得ん」。〔T四七―五一九b―c〕。

村上俊『唐代禅思想研究』（国際禅学研究所報告第四冊、一九九六年）第二部第四章「雲門と慧忠」（四二七頁以下）、第三部第一章「南陽慧忠と耽源應真」（四九六―五二八頁）に南陽慧忠のへ無情説法むじやうせつぽうの解明を中心にして、中国における無情仏性説が論じられている。

○獻偈曰……〓黄州（湖北省黄冈県）に流刑されていた一〇八四年に旅行して廬山東林寺に滞在したときのもので、「贈東林總長老」と題され、蘇軾の詩集（『蘇東坡詩集』卷三三）にも収められている。恵洪『冷齋夜話』卷七に「東坡廬山偈」と題して本偈と「題西林壁」の二偈を取り挙げ、黄魯直の評を載せている。それによつて叢話類に記載されるようになる。他に常総に与えた尺牘二通「與東林廣惠禅師二首」（『蘇軾文集』卷六一、中華書局）と「東林第

一代廣惠禪師真贊」(同卷二二)がある。道元は本詩によって『正法眼藏』溪声山色の巻を書く。

○廣長舌 誠実で真実なる弁舌。仏三十二相の一つである廣長舌相はそのことの証である。『阿弥陀經』、「是の如き恆河沙の數に等しき諸佛、各おの其の國に於て廣長舌相を出だし、徧なく三千大千世界をを覆い、誠實の言を説く」(T二二―三四七b)。『大智度論』卷八、「摩訶般若波羅蜜は甚深にして難解難知、信受すべきこと難し。是の故に廣長舌を出だして證と爲す。舌相是の如きんば、語は必ず眞實なり」(T二五―一五a)。『伝灯録』卷六・南源道明禪師章、「僧有りて問う、一言作麼生。師乃ち舌を吐して云く、我れに廣長舌相有るを待つて、即ち汝に向つて道わん」(T五一―二四九a)。

○清淨身 清淨法身。(四二)に「青青翠竹盡是真如、鬱鬱黄花無非般若」の句が出る。その注を参照。『雲門広録』卷上、「問う、如何なるか是れ清淨法身。師云く、花藥欄」(T四七―五五二c)。

○四萬八千偈 八万四千偈が本来の句。恐らく撰者の不注意によるミスであろう。八万四千は仏の説かれた十二部經全ての教への総數。『法華經』見宝塔品第十一、「若し八萬四千の法藏、十二部經を持し、人の爲に演説し、諸の聽く者をして六神通を得しむとも、能く是の如くすと雖も、亦た未だ難しと爲さず」(T九―三二b)。

○典拠について 嘉靖十年智異山鐵窟開刊本に『普灯録』と明記されている。そこで『嘉泰普灯録』卷二三・蘇軾章をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

内翰蘇軾居士、字子瞻、號東坡。宿東林日、與照覺常總禪師論無情話、有省。黎明獻偈曰、溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身。夜來八萬四千偈、他日如何舉似人。未幾抵荆南、聞玉泉皓禪師機鋒不可觸、公擬抑之。即微服見皓。皓問尊官高姓。公曰、姓程、乃程天下長老底程。皓喝曰、且道這一喝重多少。公無對。於是尊師之。後過金山、有寫公照容者、公戲題曰、心似已灰之木、身如不繫之舟(一作眼似初生犢牛)、問汝平生功業、黃州惠州瓊州。(Z一三七―一五九d)

大字は共通の文字、小字は『普灯録』にのみ見える文字。

①八〇四（宝蔵）

②四〇八（宝蔵）

他にこの話を録すものとしては、『五灯会元』卷一七、『仏祖統紀』卷四六などがある。

### 〔七三〕 張天覺無盡居士

張天覺無盡居士。因兜卒悦和尚、舉德山托鉢話、令熟究之、公悵然不寐。至五鼓、忽垂脚翻尿器、猛省。翌旦投偈曰、  
鼓寂鍾沈托鉢廻、岩頭一拶語如雷。果然只得三年活、莫是遭他授記來。悦首肯。

\*

張天覺無盡居士。兜卒悦和尚、德山托鉢の話を擧し、之を熟究せしむるに因り、公、悵然として寐す。五鼓に至り、  
忽と脚を垂れて尿器を翻じ、猛省す。翌旦、偈を投じて曰く、「鼓寂し鍾沈みて鉢を托して廻る、岩頭の一拶語雷の  
如し。果然として只だ三年の活を得るのみ、是れ他の授記に遭い來たる莫きや」。悦、首肯す。

\*

無尽居士張天覺は、あるとき兜率（徒）悦和尚から、德山托鉢の話（德山が鉢を捧げて食堂にやってくるの）を取りあ



げ、じつくり味わうように仕むけられて、長官は胸がふさがって（一晚中）眠れず、（そのまま）朝の五つになった。フト脚をおろしたとたん、小便壺を蹴とばして、猛然と気付くところがあった。

夜が明けるや、（兜率に）次の偈を献じた、

（食事の時を知らせる）太鼓は音をたてず、鐘は静まりかえって、（徳山は）鉢を捧げて引きかえした。

巖頭が打ちこんだ楔の音は、万雷が一時にとどろくようなものすごさだった。

案のじょう、（徳山がただ）三年しか生きのび得なかつたのも、

（巖頭の）予言に呪縛されつづけたのであるまいか。

\*

○張天覺無盡居士一一〇四三一一二二。名は商英、字は天覺、号は無尽居士。蜀州新津（四川省新津県）の人。治平二年（一〇六五）の進士。初め通州（四川省達県）の主簿となり、渝州（四川重慶）の異民族の乱に当って功があり、南川県（四川）の知事となる。章惇の推薦により王安石に取り立てられて監察御史に拔擢された。崇寧元年（一一〇二）翰林学士となり、蔡京が宰相となって更に累進したが、意見が合わず左遷された。大觀四年（一一一〇）宰相となり、徽宗の華修を抑えたのでうとまれ、弾劾に遭い、河南の知事となり更に衡州に貶された。後に中央に復帰し、蔡京と交代に宰相を務めた。法党の政争にまきこまれ、浮沈の多い一生を送る。蔡京に対するに忠直の名を賜わったが、治績には特に見るものはない。宣和三年（一一二二）卒、年七十九。紹興中に文忠と諡された。妻向氏の影響によって崇仏家となり、元豊二年（一〇七九）四月、襄陽谷隱山の首座であった玉泉承皓に参じ、郢州大陽山に住せ

しめている。元祐六年（一〇九二）に江西運使となったとき、最晩年の東林常総に謁し、次いで兜率に参じた。また晦堂祖心、覚範惠洪、圓悟克勤、靈源惟政などの多くの禅僧との関係が見られる。『護法論』（大正大藏経五二卷所収）、『続清涼伝』（大正大藏経五一卷所収）、『宗禅弁』の著書があり、『無尺居士集』がある。伝記は『宋史』卷三五二、『東都事略』卷一〇二、『宋元学案』卷九六など。仏教側の資料としては、『聯灯会要』卷一六、『普灯録』卷二三、『五灯会元』卷一八、『仏祖歴代通載』卷一九、『仏法金湯篇』卷二三、『居士分灯録』卷下、『先覚宗乘』卷二、『居士伝』卷二八などがある他に、『大慧宗門武庫』、『林間録』、『羅湖野録』、『雲臥紀譚』などの宋代禅門随筆にも見られる。

○兜卒悦Ⅱ「卒」は「率」が正しい。一〇四四—一〇九一。俗姓は熊氏、名は從悦、虔州（江西省贛県）の人。子供のころ病気がちで、出家することを許された。十五歳のとき本郡の普円院徳嵩に依りて落髪した。十六歳のとき具足戒を受け、賢法師に止観を学んだ。その後、法社を歴遊した。潭州雲蓋山の守智禅師（二〇二五—一一一五）に参じ、その指示により洞山に住していた真浄克文に謁し、その法を嗣ぐ。元祐の初め、廬山棲賢寺に首衆であったが、洪州知事の熊本の請により、分寧（江西省修水県）の兜率院に住した。三関を設けて指導したことは、『無門関』第四七則に「兜率三関」として採られて有名である。元祐六年十一月三日示寂、寿は四十八。張天覺が從悦に参じたのは元祐六年八月のことである。『続灯録』卷二三、『聯灯会要』卷一五、『普灯録』卷七、『五灯会元』卷一七等に略伝と問答語句を録す。『大慧宗門武庫』にも記事がある。また『兜率悦禅師語』が『続開古尊宿語要』卷一（乙一一八）に収められている。

○徳山托鉢話Ⅱ『伝灯録』卷一六・巖頭章、「雪峰、徳山に在りて飯頭と作る。一日飯遅く、徳山は鉢を擎げて法堂に下る。雪峰、飯巾を曬す次で、徳山を見て乃ち曰く、鍾未だ鳴らず、鼓未だ打たず、老和尚は何處に向つて去

くや。徳山、方丈に却歸る。師（巖頭）、堂中に在りて之を聞き、掌を拊つて曰く、大小の徳山も猶お未だ末後の句を會せず。徳山、擧するを聞くや、侍者をして師を喚び去かしむ。問う、你是老僧を肯わざる那。師、密かに其の意を啓す。徳山、來日に上堂の説話は尋常に異なる。師は僧堂に到りて、掌を撫ち大笑して云く、且喜すらくは堂頭老漢最後の句を會するを得しことを。他後に天下の人は奈何ともせず。是の如きと雖然も、也た秣だ三年を得しのみ。三年後果然として遷化せり」（T五二—三三六a、b）。『無門関』一三則、『従容録』五五則に取り挙げられており、難解な公案とされている。畢竟して「末後句」が中心問題であるが、雪峰を導くための徳山と巖頭の芝居だとする見方も行われている。海印信は頌して、「絲を垂れしは本と鼈頭を釣らんが爲なり、鯤鯨に遇わず便ち却つて收う。剛に傍人に網を布置され、蝦を撈い蜆を撈り、聞啾啾たり」（『禪門拈頌集』卷一七）（『高麗大蔵經』第四六、二七五頁下）と言ひ、徳山をひやかしている。徳山については〔四四〕の注を見よ。

○悵然||失意のさま。『漢書』卷八五谷永伝、「悵然として望を失う」。

○五鼓||五更に同じ。一夜を五区分したその五番目。午前四時頃。

○猛省||はつと悟る。『従容録』第二〇則の本評、「法眼猛省すれば、元來却つて這裏に在り」（T五二—二四〇a）。

○岩頭||八二六—八八五。姓は柯氏、名は全歳、泉州南安（福建省南安県）の人。会昌の廃仏（八四二—五）のとき鄂州（湖北省武昌県）にいて長江のほとりで船頭となっていたが、雪峰義存（八三—九〇八）、欽山文邃と共に行脚し、洞山には特に長く滞在したようである。後、徳山に参じ、雪峰とともにその法を嗣ぐ。初め洞庭湖のほとりの臥龍院に住し、後、鄂州の唐寧に住寺し、独自の家風を振った。黄巢の乱に遇い、刃にかかつて死ぬ。そのとき、大呼一声した声が数十里に聞こえたという。我が白隱の疑団を呼び起した因縁の話となる。僖宗（在位八七三—八八八）より清嚴大師と諡さる。『祖堂集』卷七、『宋高僧伝』卷二三、『伝灯録』卷一六に略伝と語句を録す。

○一拶一撃を加えること。『碧巖録』第二三則の垂示、「衲僧門下に至つては、一言一句、一機一境、一出入、一挨一拶に深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す」(T五二—一六四a)。

○語如雷無語によつて却つてその急所・欠点を増幅して突く。『伝灯録』卷八の五台山隱峰章、「師(隱峰)、後に瀉山に到り、上座頭に於て衣鉢を解放す。瀉山、師叔の到るを聞き、先に威儀を具して堂内に下る。師、來たるを見て、便ち睡る勢を作す。瀉山便ち方丈に歸る。師は乃ち發し去る。少間して、瀉山、侍者に問う、師叔在りや。對えて云く、已に去れり。瀉山云く、去りし時什麼の言語か有る。對えて云く、言語無し。瀉山云く、言語無しと言ふ莫れ、其の聲雷の如し」(T五一—二五九b)。

○典拠について、嘉靖十年智異山鐵窟開刊本は『普灯録』と明記する。いま『普灯録』卷三三・張商英章の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

丞相張商英居士。字天覺、號無盡<sup>①</sup>。……元祐六年、奉使江左、由東林謁照覺禪師敘論、久之乃曰、南昌諸山、誰可與語。總曰、兜率悅、玉溪喜。……遂入兜率、抵擬瀑亭。公問、此是甚處。悅曰、擬瀑亭。公曰、振轉竹筒、水歸何處。悅曰、目前薦取。公佇思。悅曰、佛法不是這箇道理。及夜話、悅曰、某無夢十年矣、前五夜夢、身立孤峰頂、有日輪出于東方、而公之來、豈東方慧輪乎。徐以所見眞淨及素首座事語公。公罔惜。悅因舉德山托鉢話、令熟究之。公悵然不寐<sup>②</sup>。至五鼓<sup>③</sup>、忽垂脚翻溺器<sup>④</sup>、猛省。即造悅寢、召曰、某已捉得賊了也。悅曰、賊物在甚麼處。公扣門三下。悅曰、且去、來日相見。翌旦投偈曰、鼓寂鐘沈托鉢回、巖頭一拶語如雷、果然只得三年活、莫是遭他授記來。悅首肯、書長偈付之、囑曰、參禪爲命根未斷、依語生解、如是之法、公已深知、然有至微極細之魔、使人不覺不知墮在區宇、更宜著便。公感甚。邀至建昌、道中求悅一一窺察之、成十偈、以誌其事。悅依韻酬之。是歲書雲日、悅澡浴示徒、說偈而化。訃至、公哭而慟、及大拜。乞謚悅號眞寂禪師、遣親持文、祭其塔。(Z一三七—一六〇b~d)

大字は共通する文字、小字は『普灯録』にのみ見える文字。

- ① 盡十（居士）（宝蔵） ②（兜卒悦和尚）十舉（宝蔵） ③ 寐レ寐（宝蔵） ④ 鼓レ鼓（宝蔵）  
 ⑤ 溺レ尿（宝蔵） ⑥ 鐘レ鐘（宝蔵） ⑦ 回レ廻（宝蔵） ⑧ 巖レ岩（宝蔵）

『宗門武庫』に、東林常総から兜率に行き、兜率との問答によつて投機の頌が作られる経緯が詳しく記されている。参考までに該当部分を引くと次のようである。

後に江西の漕と爲り、遍ねく祖席に參ず。首め東林照覺總公に謁す。總、其の所見の處を詰うに、己と符号す。乃ち印可して曰く、「吾に得法の弟子有り、玉溪に住す（乃ち慈古鏡なり）、亦た與に語るべし」。無盡復た按部して分寧を過ぎるに因り、諸禪之を迂じかう。無盡到りて先に敬を玉溪慈に致し、次に諸山に及び、最後に兜率悦禪師を問う。悦は人と爲り短小なり。無盡は曾て龔德莊の『聰明にして可よき人なり』と説いうを見みく。乃ち曰く、「公は文章を善くすと聞く」。悦、大笑して曰く、「運使、一隻眼を失却し了れり、某は臨濟の九世の孫なり、運使に對して文章を論ずるは、運使の某に對して禪を論ずるが如し」。無盡は其の語を然りとせず、乃ち強いて指を屈して曰く、「是れ九世なり」。又た問う、「玉溪は此を去ること多少ぞ」。曰く、「三十里」。曰く、「兜率は」。曰く、「五里」。無盡は是の夜乃ち兜率に至る。……無盡、悦と語る次で、東林を稱賞ほむ。悦は其の説を未だ肯わず。無盡に乃ち寺後の擬瀑軒に題する詩あり、其の略に云く、「廬山に向つて落處を尋ねずんば、象王の鼻孔は謾みだり（漫）に天を遼あかん」と。意は其れ東林を肯わざるを譏るなり。公、徐よく語りて宗門の事に及ぶ。悦曰く、「今日、運使と相い陪はり、人事已に困ず、珍重して睡り去らん」。更よの深ふくるに至つて、悦は起き來たつて無盡と此の事を論ずるに、焚香して十方の諸佛を請じて證と作さしむ。「東林は既に運使を印可すれども、運使は佛祖の言教に於て少しく疑有りや」。無盡曰く、「有り」。悦曰く、「何等の語をか疑う」。曰く、「香巖獨脚の頌と徳山托鉢の因縁を疑う」。悦曰く、「既に此に於て疑有らば、其餘は安ぞ無きを得んや、只如たば末

後の句は是れ有りや是れ無しや」。無盡曰く、「有り」。悦、大笑して遂に方丈に歸りて門を閉却す。無盡は一夜の睡り穩やかならず。五更に至りて牀を下らんとして蹋牀を觸翻し、忽然と省得す。頌有りて云く、……。遂に方丈の門を叩きて云く、「某已に賊を捉得え了る」。悦曰く、「賊物は甚處にか在る」。無盡語無し。悦云く、「都運且く去れ、來日に相見せん」。翌日、無盡遂に前頌を擧して之を呈す。悦乃ち無盡に謂いて曰く、「參禪するも只だ命根斷たざるが爲に、語に依りて解を生ず。是の如きの説は、公已に深く悟る。然れども極微細の處に至つては、人をして覺せず知らずして區宇に墮在せしむ」(丁四七—九五—c)。

〔七四〕左丞范冲

左丞范冲、謁圓通旻禪師曰、某宿世作何福業、今生墮在金紫囊中、去此事稍遠。旻呼内翰。公應喏。旻曰、何遠之有。公躍然曰、再乞師指誨。旻拊膝一下。公豁如。

\*

左丞の范冲、圓通旻禪師に謁して曰く、「某、宿世に何の福業を作してか、今生に金紫囊中に墮在し、此の事を去ること稍や遠きや」。旻、内翰と呼ぶ。公、「喏」と應う。旻曰く、「何の遠きか之れ有らん」。公、躍然として曰く、「再び師の指誨せんことを乞う」。旻、膝を拊つこと一下す。公、豁如たり。

\*

左大臣の范冲は、(廬山)円通寺の(道)旻禪師に参じて、(次のように)申しあげたものだ。

私は前生で、どんな善根功德をつんだというので、この世で金紫の袋につめこまれ、仏法の大事から程遠い身になったのでしょうか。

旻は(范冲の)名を呼んだ、内府どの。

公はハイ、と答えた。

何が程遠いものか。

公は飛びあがるように、もういちど御示しをねがう。

旻は(自分の)膝を一打ちした。

公は(胸が)カラリとひらけた。

\*

○左丞Ⅱ官名、尚書省に属す。次官。各時代に常に置かれ、宋代ではその権が重く、執政官として尚書令(宰相・長官)とならんで大政に参議した。『事物紀原』卷五、「左右丞。秦に尚書丞一人を置く。漢の成帝は建始四年に四人を置く。光武始めて其の二を減じ、左右に分け、令僕の事を佐く。唐以来、尚書の下に在り、宋朝の官制改まりて上に陞り、又た執政官と爲る」。

○范冲Ⅱ『普灯録』卷二三、『五灯会元』卷一八によれば、范冲は、字は致虚、江西に知となり、左丞となった人。

『叢林盛事』卷上では左丞范致靈(乙二四八―三七b)とし、『居士分灯録』卷下、『先覚宗乘』卷三では、「范冲、

字は謙叔、一に字は致虚（Z二四八一二四八b）とある。『宋史』卷四三五、『宋元学案』卷二二に立伝される范冲（一〇六七—一一四二）は、字は元長であり、左丞になることなく、江西に知たりしときもなかった。禪門で立伝されている范冲なる人物は存在しないことになる。但し『宋史』卷三六一に立伝されている范致虚（？—一二二九）は、字は謙叔、江西に知となり、左丞となった人である。要するに范冲と范致虚が混同されており、江西に知たりし時、円通道旻と問答を交すのは左丞范致虚、字は謙叔その人である。

建州建陽（福建省建陽県）の人。元祐三年（一一〇八）の進士。太学博士となったが、罪を獲て停官となる。徽宗が即位し、中書舍人に進む。大観四年（一一二〇）のある時期、江西に知となった（『北宋経撫年表』卷四）。政和七年（一一二七）に尚書左丞となる。靖康の初め（一一二六）陝西宣撫使となったが、金軍の侵攻に戦わずして敗れた。高宗が即位し、鄧州の知事となるが、金の進入に逃げ出し、安遠軍節度副使に左遷された。建炎三年（一一二九）、鼎州の知事として赴く途中、巴陵で卒した。年六十余。

○圓通旻禪師一一〇四七—一一一四。興化仙游（福建省仙游県）の人、俗姓は蔡氏。東京景德寺の徳（得）祥律師に依りて出家し、熙寧二年（一一〇六九）、試経得度した。初め大瀉慕喆（？—一一〇九五）の室に久しく親しんだが、後、泐潭應乾（一一〇三四—一一〇九六）を慕い、その法を嗣ぐ。建中靖国元年（一一〇二）江夏（湖北省武昌県）の灌溪に出世し、三年（一一〇四）廬山の円通寺に移る。政和の初め（一一二二）蔡京の奏により、円機の号を賜わる。政和四年一〇月九日示寂、閏世六十八、坐夏五十。『嘉泰普灯録』卷一〇、『僧宝正統伝』卷一、『五灯会元』卷一八、『大明高僧伝』卷七等に略伝及び問答語句を録す。

○福業 人天の樂果を招く有漏の善業。『伝灯録』卷一・龍樹章、「後に南印度に至る。彼の國の人、多く福業を信ず。尊者爲に妙法を説くを聞き、通相たがひに謂いて曰く、人に福業有るは、世間第一なり。徒いなすに佛性を言う、誰か能く



之を靚ん」(T五二—二〇b)。

○墮在金紫囊中〓金紫の衣服を着る高位高官の身分に陥る。「墮在」は、はまり込んでぬけ出られぬ状態、常にネガティブな意を帯びる。「囊」は袋のことだが、高位の官服をおとしめた言い方。『五灯会元』卷一八・范冲章では、「守豫章、過圓通、謁旻禪師。茶罷曰、某行將老矣、墮在金紫行中」(Z二三八—三五八d)とある。「金紫行」とは金印紫綬の丞相の仕事。

○此事〓仏法の一大事、禪の極則。『伝灯録』卷七・帰宗章、「僧問う、此の事は久遠なり、如何が用心せん。師云く、牛皮を露柱に鞅はるに、露柱は啾啾として叫ぶ。凡耳には聴くとも聞けず、諸聖は呵呵と笑う」(T五二—二五六a)。

○内翰〓翰林学士のこと。(七二)の内翰の注を参照。

○躍然〓いきいきしたさま。『大明高僧伝』卷四・釈明得伝、「一夕初夜趺坐するに、豁爾として心境冥會し疑滯氷釋す。乃ち躍然と偈を説いて曰く、千年の翠竹萬年の松、葉葉枝枝是れ祖風。云々」(T五〇—九一三a)。

○拊膝一下〓絶対主体として己の呈示か。待考。『五灯会元』卷一八・雲巖典牛天遊章、「一日〔泐〕潭普説して曰く、諸人、苦苦しきりに準上座しに就いて佛法を覓む。遂かくして膝を拊つて曰く、會すや、雪上に霜を如う。又た膝を拊つて曰く、若也もし會せずんば、豈に見ずや、乾峰示衆して曰く、一を擧すも二を擧すを得ず、一著みづかを放過せば第二頭に落在す、と。師、聞いて脱然と穎悟す」(Z一三八—三五四b)。また円通旻は遺偈し拊膝一下して示寂した。

『五灯会元』卷一八・范冲章以後の諸資料では、「拊膝一下」以下の部分は、「通曰く、此より洪都に去くに四程有り。公、佇思す。通曰く、見るは即便すぐに見よ、思わんと擬せば即ち差う。公乃ち豁然と省有り」となっている。

○豁如〓カラリと執らわれないさま。豁然、豁爾とも。『史記』卷八・高祖本記、「高祖は人と爲りな仁にして人を

愛し、施を喜びて意豁如たり」。『宋高僧伝』卷一七・玄奘章、「徳山禪師に見えてより、豁如として自適す」(T五〇一八—一八a)。

○典拠について 嘉靖十年智異山鐵窟開刊本に『普灯録』と明記されている。いま『普灯録』卷二三・范冲章をべースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

左亟<sup>①</sup>范冲居士、字致虚。由翰苑守豫章、過圓通、謁圓機道旻禪師。茶罷曰、某宿世作何福業、今生墮在金紫囊中、去此事稍遠。旻呼内翰。公應喏。旻曰、何遠之有。公躍然曰、乞師再垂指誨。旻拊膝一下。公擬對。旻曰、見即便見、擬思即差。公乃豁如。(Z一三七—一六一b)

大字は共通の文字、小字は『普灯録』に見える文字。

①亟 ②丞 (宝蔵) ③圓 + (通) (宝蔵) ④(再) + 乞 (宝蔵)

### 〔七五〕 中丞盧航

中丞盧航與旻禪師擁爐次、公問、直截一句、請師指示。旻厲聲揖曰、看火。公撥衣、忽大悟。謝曰、元來佛法無多子。旻喝曰、放下著。公應喏喏。

\*

中丞盧航は旻禪師と爐を擁する次で、公問う、「直截の一句、師の指示を請う」。旻は聲を厲しくし揖して曰く、「火

を看よ」。公は衣を撥はらうに、忽ち大悟す。謝して曰く、「元來佛法多子無し」。旻、喝して曰く、「放下著せよ」。公、「喏はいはい」と應う。

\*

警視庁長官の盧航は、(円通の道) 旻禪師と、さしで爐をかこんでいた時、いきなり公がきく、ずばり一言、どうか先生、お示しく下さい。

旻は公に会釈して荒々しく声をあげた、火がついておりますぞ。

公は衣を払って、忽然と悟った。

礼をただして言うのに、何ということだ、仏法には余計なものがない。

旻は一喝した、(そいつを) 捨てるんだ。

公は答えた、ハイハイ。

\*

○中丞中丞 御史中丞。宋代では御史台の長官で、執政に昇進する要職。『事物紀原』持憲儲闈部第二三、「中丞。漢の初め、御史大夫に兩丞有り。一に御史丞と曰い、二に中丞と曰う。初學記に曰く、秦の官なり、漢は之に因る。之を中丞と謂う、其れ別に殿中に在りて、蘭臺秘書を掌り、外に部刺史を督し、内に侍御史を領すを以て故に云うな

り。成(帝)・哀(帝)の間に更に御史長史と名づく、光武に復た中丞と曰う。

○盧航『宋人伝記資料索引』巻五によれば、「政和三年、龍圖閣待制を以て再び江寧府に知たり、在任三年」。詳しい伝記は不明。仏教側の資料としては『嘉泰普灯録』巻二三、『五灯会元』巻一八、『居士分灯録』巻下に盧航章があり、本話を録す。

○旻禪師『円通道旻禪師』(七四)を見よ。

○直截『端的、簡直。』『禪林類聚』巻一七、「径山杲云く、金剛圈栗棘蓬、玄沙三種病、石鞏一張弓、直截に君が爲に説かん、新羅は東海に在り」(Z一七—一〇四a)。「三六」の「直截忘詮」の注も参照。

○厲聲『声高にきびしい調子の言い方。』『祖堂集』巻六・投子章、「時に暴黨の魁帥有り、刃を執ちて庵前に厲聲して曰く、和尚は此間に在りて什摩をか作す。師曰く、吾れ此間に在りて傳心す。魁帥云く、个の什摩をか傳う。師曰く、佛心。云々」(『禅学叢書之四』、二一三八)。

○看火『「看」は用心する、気をつけるの意で、注意を喚起する。袁賓『禅宗著作詞語匯釈』(江蘇古籍出版社)「看」の項を参照。

○撥衣『払衣に同じ。火の粉を払った。』『礼記』曲礼上、「將に席に即くに、容作ずる母かれ。兩手もて衣を握げて齊を〔床より〕去ること尺にして、撥衣する母かれ」。道元『正法眼蔵』行持、「光陰ヲスコサス、頭然ヲハラフベシ」(T八二—一三二a)。

○元來佛法無多子『臨濟録』行録、「師(臨濟)、大愚に到る。大愚問う、什麼處より來たる。師云く、黄檗の處より來たる。大愚云く、黄檗は何の言句か有る。師云く、某甲は三度佛法的の大意を問うて、三度打たる。不知某甲は過有りや過無しや。大愚云く、黄檗は與麼も老婆にして、汝が爲にし得て徹困なるに、更に這裏に來たりて、

過有りや過無しやと問う。師は言下に大悟して云く、元來黄檗の佛法多子無し。大愚、搗住して云く、這の尿牀の鬼子、適來は過有りや過無しやと道いしに、如今却つて道う、黄檗の佛法多子無しと。你、箇什麼の道理をか見たる、速あ道え速あ道え。師は大愚の脅下を築くこと三拳す。大愚、托開して云く、汝が師は黄檗なり、我が事に干るに非ず」(T四七—五〇四c)。この句については、入矢義高「禪語つれづれ」(『求道と悦楽—中国の禪と詩—』所収、岩波書店)に詳しい解説がある。

○放下著Ⅱ「仏法多子無し」ということも下に置け。『趙州録』、「問う、一物も將ち來たらざる時、如何。師云く、放下著よ」(Z一—八一—一六二d)。

○典拠についてⅡ嘉靖十年智異山鐵窟開刊本には『普灯録』と明記されている。いま『嘉泰普灯録』卷二三・盧航章をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

中亟<sup>①</sup>盧航居士與旻禪師擁爐次、公問、諸家因縁、不勞拈出、直截一句、請師指示。旻厲聲揖曰、看火。公急撥衣、忽大悟。公謝曰、灼然<sup>②</sup>佛法無多子。旻喝曰、放下著。公應喏喏。(Z二三七—一六一b)

大字は共通の文字、小字は『普灯録』に見える文字。①亟Ⅱ丞(宝蔵) ②灼然Ⅱ元來(宝蔵)

### 〔七六〕 侍郎張九成

侍郎張九成、一日如廁、以栢樹子話究之、聞蛙鳴、釋然契入。有偈曰、春天月夜一聲蛙、撞破乾坤共一家。正恁麼時誰會得、嶺頭脚痛有玄沙。

\*

侍郎張九成、一日、廁かわやへ如ゆき、栢樹子の話を以て之を究むるに、蛙の鳴くを聞きて、釋然と契入す。偈有りて曰く、「春天の月夜一聲の蛙、乾坤を撞破し共に一家。正恁麼の時誰か會得す、嶺頭脚痛玄沙有り」。

\*

内府の張九成は、その日もトイレで、栢樹子の工夫に熱中していた。蛙の聲が耳に入ったとたん、疑念が吹っついで、ぐさりと手応えがあった。

偈ができた。

春の夜のおぼろ月に、蛙が一声大きく呼びかけた。

天地を突きくずしての、一つの家属。

ずばりこの時のことが、誰に理解できるものか。

峠の石に足をとられて、大ケガをした玄沙ぐらいのものだ。

\*

○侍郎＝秦漢時代には、郎中令の属官の一つ。隋唐以後は、中書省、門下省、尚書省の六部（吏部・戸部・礼部・兵部・

刑部・工部)に置かれた次官のこと。

○張九成(一〇九二—一一五九)。字は子韶、号は横浦居士、無垢居士。先祖は開封の人、錢塘(浙江省杭県)に移住した。程門の楊時に師事した。紹興二年(一一三二)の進士。官は礼部侍郎に至る。講和派の秦檜(一〇九〇—一一五五)と対立し、邵州(湖南省宝慶県)に貶され、次いで南安軍(江西省大庾県)に流刑となり、居ること十四年。秦檜の死後、温州(浙江省永嘉県)の知事に復起した。紹興二十九年(一一五九)六月卒す。年六十八。宝慶の初め(一二二五)、太師を贈られ、崇国公に封じ、文忠と諡さる。『横浦集』がある。

經学をよく研究し、『孟子伝』『横浦心伝』などの著書があるが、禪の影響を強く受けており、朱子は「洪水や猛獸の災の比ごとくに畏るべし」として、その書を斥けた。多くの禪者と交渉をもち、初め宝印楚明(雲門下八世)に謁し、栢樹子の話により導かれるが省なく、後に蘇氏の館に滞在したとき、省があつたことはこの則に取り挙げられた通りである。紹興七年(一一三七)、径山に住持した大慧宗杲(一〇八九—一一六三)に参じ、「格物の旨」を問うて頓領し、無垢居士と号した。大慧は紹興十一年(一一四二)、九成のために上堂し、「神臂弓」という武器の事に言及し、秦檜の政治を批判したとして、九成に連坐し、衡州に流謫となり、僧席を剥奪されて十五年間の塾居の身となつている。『宋史』卷三七四、『宋元学案』卷四〇「横浦学案」。仏教側の資料としては、『聯灯会要』卷一八、『普灯録』卷二三、『五灯会元』二〇、『大慧年譜』、『居士分灯録』卷下、『先覚宗乘』卷二、『仏法金湯篇』卷一四、『居士伝』卷三二などがある。

○如廁(便所)は思索を練るのに集中できる場所の一つ。宋の董弁撰『閑燕常談』、「歐陽文忠公曰く、吾れ平生に文章を作るに、多く三上在り、馬上、枕上、廁上なり」。『禪関策進』諸祖苦功節略第二、「高峰妙禪師は、衆に在りて脅席たぶきに沾ぬけず、口體俱くたうに忘る。或る時、廁かに如あき、中單はだきにして出づ」(T四八一—一〇六a)。

○栢樹子話Ⅱ『趙州録』、「時に僧有りて問う、如何なるか是れ祖師西來意。師云く、庭前の栢樹子。學云く、和尚、境を將て人に示す莫れ。師云く、我れ境を將て人に示さず。云く、如何なるか是れ祖師西來意。師云く、庭前の栢樹子」(Z二一八—一五四a)。

○聞蛙鳴、釋然契入Ⅱ音声を契機として真理に悟入することを、百丈は「觀音入理の門」(『伝灯録』卷六) (T五一—二五〇a)と呼ぶ。『伝灯録』卷二・安国慧球章、「若し文殊門より入る者は、一切の無爲、土木瓦礫も汝が機を發するを助く。若し觀音門より入る者は、一切の音聲、蝦蟆蚯蚓も汝が機を發するを助く。若し普賢門より入る者は、歩を動かさずして到る」(T五一—三七二b)。「契入」は契当悟入。『禪関策進』、「因地一聲、心體に契入せん」(T四八—一〇四b)。

○撞破乾坤共一家Ⅱ『葉県広教省禪師語録』「広教勘弁語并行録」に下記がある。「因に僧入室し、趙州和尚の栢樹子の話を請益す。師云く、我は汝が與たぬに説くを辭さずも、還た信すや。僧云く、和尚の重言、争か敢て信ぜざらん。師云く、汝還た簷頭のさきの水滴を聞くや。其の僧、豁然として覺えず失聲して云く、唧。師云く、爾箇なん什麼の道理を見るや。僧便ち頌を以て對えて云く、簷頭のさきの水滴、分明に瀝した瀝たる、乾坤を打破し、當下に心息む。師、忻然たり」(『禅学叢書之二・古尊宿語要』八三頁下段、中文出版社)。「共一家」については、(六九)の張拙の悟道頌を参照。

○嶺頭脚痛有玄沙Ⅱ雪峰を辭して遍歴に出ようとして、飛猿嶺の山頂で石につまづいて大悟した玄沙の話を踏まえる。『祖堂集』卷一〇・玄沙章、「雪峰、一日、誑よびて曰く、備頭陀未だ曾て諸方を經歷せず、何ぞ看ること一轉するを防げん。是の如く四度なるを得たり。師は和尚の切なるを見、和尚の處分に依りて裝裹一切しり、恰も去りて嶺上に到るに、石頭いしに踢著し、忽然として大悟し、後に失聲して云く、達摩は過來せず、二祖は伝持せずと。又大樹に上り、江西を望見し了りて云く、你的は婆いを奈い許かんせんと。使ち雪峰に歸る」(『禅学叢書之四』、三三七)。



大慧『正法眼藏』には次のように録している。「玄沙和尚、諸方を徧歴して知識を參尋せんと欲し、囊を攜えて嶺を出でんとして、脚指を築著し、流血して痛楚<sup>いた</sup>し。歎じて曰く、是れ身は有るに非ざるに、痛何よりか來たる。便<sup>すま</sup>に雪峰に回る」(Z二一八―五二a)。

○典拠について 嘉靖十年智異山鐵窟開刊本には『普灯録』と明記されている。いま『嘉泰普灯録』卷二三・張九成章をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

侍郎張九成居士、字子韶、號無垢。未第、因客談楊文公呂微仲諸名儒所造精妙、皆由禪學而至也、於是心慕之。聞寶印楚明禪師、道傳大通、居淨慈、即之、請問入道之要。明日、此事唯念念不捨、久久純熟、時節到來、自然證入。復舉趙州栢樹子話、令時時提撕。公久之無省。辭。謁善權清禪師、問曰、此事人人有分、箇箇圓成、是否。清曰、然。公曰、爲甚某無箇入處。清於袖中出數珠、示之曰、此是誰底。公俛仰無對。清復袖之曰、是汝底則拈取去、纔涉思惟、即不是汝底。公悚然。未幾、留蘇氏館。一夕<sup>①</sup>如廁、以栢樹子話究之、聞蛙鳴、釋然契入。有偈曰、春天月夜一聲蛙、撞破乾坤共一家。正恁麼時誰會得、嶺頭脚痛有玄沙。屈明謁法印一禪師、機語頗契。(Z二三七―二六二b)

大字は共通の文字、小字は『普灯録』に見える文字。①夕 日 (宝蔵)

### 〔七七〕 禮部侍郎楊傑

禮部侍郎楊傑、歴參諸名徳、晚從天衣遊。衣每引老龐機語、研究深造。後奉祠泰山、雞一鳴、覩日如盤湧、忽然大悟。因以有男不婚有女不嫁之語、別曰、男大須婚、女長須嫁。討甚閑功夫、更說無生話。辭世偈曰、無一可戀、無一可捨。大虛空中、之乎者也。將錯就錯、西方極樂。

\*

禮部侍郎楊傑、諸の名徳を歴參し、晩のちに天衣に從いて遊ぶ。衣は毎に老龐の機語を引き、研究深いたきに造らしむ。後、泰山に奉祠するに、雞一鳴し、日を觀るに盤湧の如し、忽ち大悟す。因りてへ男有るも婚せず、女有るも嫁がずの語を以て、別して曰く、「男は大にして須らく婚すべし、女は長じて須らく嫁ぐべし。甚なんぞ閑功夫を討もとめ、更に無生の話をを説かんや」。辭世の偈に曰く、「一も戀うべきもの無く、一も捨つべきもの無し。大虚空中に之しこ乎しゃ者也。錯を將て錯を就す、西方は極樂」。

\*

内務大臣（礼部）の楊傑は、あちこちの名だたる僧に參じて、さいごに天衣（義懷）について学んだ。

天衣はその都度、龐居士の公案を引いて、（相手の心境を）確認し深奥に導いた。

やがて（楊は）泰山の祠祿を得て、ある雞鳴に、盆のように燃えたつ太陽を見て、忽然大悟した。

そこで龐居士の「息子はいても嫁とらず、娘はいても、嫁がぬ」という公案をふまえて、替え歌をつくった、

息子が大きくなって嫁をとらねばならず、

娘も年ごろ、嫁にださねばならん、

何をつまらん思案にくれて、

今さら無生のことなど。

(さらに) 辞世の歌がある、

何を恋い願うではなし、

何を放下することもない、

大虚空のまっただ中で、

四の五のと、

間違いの上塗りかさね、

西方極楽などと。

\*

○楊傑||字は次公。無為(安徽省無為県)の人。嘉祐四年(一〇五九)の進士。無為子と号す。元豊中(一〇七八―八五)、官は太常に進み、礼楽の案件については審議にかかわった。元祐中(一〇八五―九四)、礼部員外郎となる。潤州(江蘇省鎮江県)の知事となり、両浙提点刑獄に除せられた。卒年七十。無為集十五卷、楽記五卷あり。『宋史』卷四四三、『東都事略』卷一一五。仏教側の資料には、『嘉泰普灯録』卷二一、『五灯会元』卷一六、『居士分灯録』卷上、『先覚宗乘』卷二、『仏法金湯篇』卷二二、『居士伝』卷二二などがある。禅の他に浄土信仰を持ち、丈六の阿弥陀仏を絵き、身に持ち観念すること終日であったといわれる。明の株宏撰『往生集』卷二(T五―一三九c)に伝あり。また元祐中の『宗鏡録』の開板に際して序を付している。

○天衣||天衣義懐。九九三―一〇六四。〔四六〕の「懐禪師」の注を見よ。

○老龐機語Ⅱ〔六八〕を参照。

○奉祠Ⅱ宋代には、祠録の官を設け、職を罷めた臣僚に宮觀を管理するという名目で、事に任せず、余生を送る特典を与えることを奉祠と言った。しかし、ここではそのことを指すのではなく、「神をまつる」意として用いられているか、待考。

○泰山Ⅱ山東省泰安県。海拔は一五三二メートル。広い華北平野の東方にただ一つ屹立している。古来より中国に於ける神聖なる山で、天子の祭るべき聖山として仰がれる。秦の始皇帝、漢の武帝、宋代には真宗皇帝などが封禪の儀式を行った。

○雞一鳴、觀日如盤湧Ⅱ日常日々繰り返される自然の営み。「雞鳴」は、一日を十二時に分けたときの丑の時刻（午前二時頃）、あかつき。「盤湧」は、雄大にゆったりと昇り行くさま。「文選」卷三四「七発」に、波の百態を述べる中に「匄ごう隱いん匈こう磕くつとし、軋盤涌裔とし、原もともと當るべからず」とあり、李善注は、「盤は盤礴を謂い、廣大な貌なり。涌裔は行く貌なり」。「伝灯録」卷一六・黄山月輪章、「問う、如何が本來の面目を見るを得ん。師曰く、石鏡を懸くるを勞せず、天曉自ら鶏鳴く」（T五一一三三二c）。王安石「登飛來峰」の詩、「飛來山上千尋の塔、聞説きくならく、鶏鳴に日の昇るを見ると。浮雲の望眼を遮ぐを畏れず、自ら身は最高層に在るに縁ればなり」。

○閑功夫Ⅱ余計な手間ひまを費すこと。「大慧語録」卷五、「僧問う、暫く一問を借りて以て影草と爲す時如何。師云く、這の閑工夫没なし」（T四七七八三〇b）。

○無一可戀、無一可捨Ⅱ諸法は空性の故に恋慕して取るべきなく、厭悪して捨てるべきものもない。仏教の基本的な教えの一つ。「思益經」卷三、「諸法は捨つべからず、亦復また取るべからず」（T二五―五三b）。「信心銘」、「至道は難無し、唯だ揀択を嫌う」（T五一一四五七a）。「往生集」「居士分灯録」「先覺宗乘」「居士伝」は、「生

亦無可戀、死亦無可捨」とする。

○大虚空中、之乎者也Ⅱ虚空は真如法界、空性の喩え。「虚空にテニヲハ」とは、無説無示の法を説くこと。虚空にはテニヲハは付けられぬ以上、いくら付けても付けたことにはならない。従ってそのテニヲハを取ることもないし、捨てることもない。「無一可戀、無一可捨」の喩えによる言い換え。「之乎者也」は語助詞、禪門では文字言説をいう。『虚堂録』卷二、「一大藏經は箇の鴉鳴鵲噪を出でず、九經諸史は箇の之乎者也を出でず」(T四七一〇〇三a)。「応庵曇華禪師語録」卷九「示潮上人」、「黄面老子は四十九年一藏の之乎者也を説く」(Z二二〇―四三九c)。

○將錯就錯、西方極樂Ⅱ虚空にテニヲハを付けるといふ錯りに錯りを重ねて、ついに西方には極樂浄土。虚空に極樂浄土といふテニヲハを付けて一生を押し通した。「將錯就錯」は、間違いをいつまでも間違いで押し通すことによつて、強引に自己主張に転化すること。『聯灯会要』卷二八・道楷章、「祖師は已<sup>す</sup>是<sup>で</sup>に錯つて説く。今日錯を將て錯を就すを免れずも、曲げて今時の爲にす」(Z二二六―四五九b)。次の「典拠について」の注に見られるように、「普灯録」では「西生極樂」とあり、「錯まりを強引に押し通せば、西方にも極樂が生じる」の意。

○典拠についてⅡ嘉靖十年智異山鐵窟開刊本は『普灯録』と明記する。いま『嘉泰普灯録』卷二二の楊傑章をベースにして、『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

禮部<sup>①</sup>楊傑居士、字次公、號無爲。歷參諸名宿<sup>②</sup>、晚從天衣義懷禪師遊。懷<sup>③</sup>每引老龐機語、令研究深造。後奉祠泰山、雞一

鳴、觀日如盤湧、忽大悟。因以有男不婚有女不嫁之偈<sup>④</sup>、別曰、男大須婚、女長須嫁。討甚閑工夫、更説無生話。

書以奇懷、懷稱善。……(中略)……辭世偈曰、無一可戀、無一可捨、大虚空中、之乎者也、將錯就錯、西生<sup>⑤</sup>極樂。

(Z一三七—一五六a)

大字は共通する文字、小字は『普灯録』にのみ見える文字。

- ①部十(侍郎)(宝蔵)
- ②宿||徳(宝蔵)
- ③懷||衣(宝蔵)
- ④偈||語(宝蔵)
- ⑤工||功(宝蔵)
- ⑥生||方(宝蔵)

〔七八〕楊文公億

楊文公億、謁廣惠璉禪師。夜語次、公問、兩介大蟲相咬時如何。璉以手作曳鼻勢曰、這畜生更踣跳在。公於言下、脱然無疑。有偈曰、八角磨盤空裏走、金毛師子變作狗。擬欲藏身北斗中、應須合掌南辰後。

\*

楊文公億、廣惠璉禪師に謁す。夜に語る次、公問う、「りょうこ兩介の大蟲、相咬む時如何」。璉、手を以て鼻を曳く勢を作して曰く、「この畜生、更に踣跳する在り」。公、言下に於て脱然として疑無し。偈有りて曰く、「八角の磨盤空裏に走り、金毛の師子變じて狗と作る。身を北斗中に藏せんと擬欲せば、應に須らく南辰の後より合掌すべし」。

\*

楊億（文公）が、広惠璉禪師におめにかかり、ある夜話しのこと。

公、二頭の虎が咬みあう時は、さて。

璉は手で（公の）鼻を、ぐいとひねりあげる形で、

コンチキショウ、まだいきりだつてやがる。

公は言下に、ずっこけて、疑いが消えた。

そこで、（投機の）歌にいう、

八角の大石臼が、大空いっばいに回転し、

老巧な師子が狗にかわつた。

北斗星の後に身をかくそうと思えば、

南極星の背後でゴメンゴメンする。

\*

○楊文公億 九七四—一〇二〇。字は大年、建州浦城（福建省浦城県）の人。七歳にして文を善くし、十一歳のとき、太宗に召されて詩賦を試みられ、秘書省正字を授けられた。淳化中（九九〇—九四）、進士第を賜わり、光祿寺丞となる。真宗のとき、『太宗実録』八十卷、『冊府元龜』一千卷の撰述に参与し、官は翰林学士より工部侍郎兼史館修撰に至つた。天禧四年（一〇二〇）卒、年四十七。文と諡された。北宋初の大文章家であり、「億は天性穎悟にして、幼より終に及ぶまで、翰墨を離れず。文格は雄健、才思は敏捷、略く凝滞せず、客と談笑しながら、翰を揮つ

て輟めず。……當時の學者、翕然に之を宗とす。博覽強記にして尤も典章制度に長ず」（『宋史』三〇五）と言われている。また詩は唐の李商隱を真似、西崑体詩の中心的存在である。『宋史』卷三〇五、『東都事略』卷四七。仏教側では、『景德伝灯録』を刊削裁定し、その序文を作り、『大中祥符法宝録』の編纂者として知られる。文集である『武夷新集』卷七に収められている「仏祖同参集序」は、『景德伝灯録』の成立を考えるうえで重要な文献である。広惠元璉と出会うのは、大中祥符七年（一〇二四）、汝州（河南省臨汝県）の知事となったときのことであり、その時の感激を綴って、共に『伝灯録』の裁定を行った李維にあてた手紙が残っており（『天聖広灯録』卷一八、『禪林僧宝伝』卷一六、元版『伝灯録』卷末）、この人の禪の経歴が語られている。また今に伝わらぬが、その時の見聞をまとめた『汝陽禅会集』十三卷があった。

『天聖広灯録』卷一八、『聯灯会要』卷一三、『嘉泰普灯録』卷二三、『五灯会元』卷一二に略伝と問答語句を録す。また『居士分灯録』卷上、『先覚宗乘』卷二、『仏法金湯篇』卷一一、『居士伝』卷二〇に詳伝がある。更に『羅湖野録』卷下の楊億の章に『汝陽禅会集』の序が録されており注目される。石井修道『宋代禅宗史の研究』第一章第二節「『仏祖同参集』と『景德伝灯録』」（大東出版社、一九八七年）、柳田聖山『禅の文化』総説「1 問題の所在」（京都大学人文科学研究所、一九八八年）に、楊億に関連する記述がある。

○廣惠璉禪師〓九五一一〇三六。名は元璉、泉州晋江（福建省晉江県）の人、俗姓は陳。十五歳のとき報劬院で僧となり、次いで招慶院真覚禪師省僉に参じ、炊事係となる。『維摩経』を誦して、招慶に「経は這裏に在るが、維摩はどこにいるか」と問われ、答えられず、閩中の尊宿五十余員に謁したが、契旨できず、河南の首山省念に参じて大悟し、その法を嗣ぐ。景德甲辰（一〇〇四）、汝州の広慧寺に開法した。時に王署が汝州の知事（石井前掲本では、王署の知汝州は天禧四年へ一〇二〇）以降のことで、その時のこととされる）をしており、これを州治に訪れて問答



している。また許式・楊億が参問した。景祐三年（一〇三六）九月二六日示寂、寿八十六。『禪林僧宝伝』卷一六、『五灯会元』卷一一は、問答語句及び楊億の李維への手紙を録す。『天聖広灯録』卷一七、『聯灯会要』卷一二は問答語句のみ。『羅湖野録』卷下の広慧璉禪師章は、伝の欠を補うものである。

○兩介大蟲相咬時如何＝もとは楊億が雲居（或は雲門・雲巖とも）の諒監院に尋ねた問い。『聯灯会要』卷一三・楊億章、「璉問う、侍郎は曾て甚麼人に見い來たる。楊云く、億は曾て雲居の諒監寺に問う、兩箇の大蟲相咬む時は如何。諒云く、一合相。億云く、某甲は只管に看るのみ、と。未審恁麼に道うは還た得きや。璉云く、老僧は然らず。楊云く、請う和尚、一轉語を下せ。璉云く、但だ請う問い來たれ。楊、前問を理す。璉、楊の鼻孔を搦つて云く、這の畜生、更に蹠跳し看よ。楊は當下に歸するを知り、欣然として禮謝す」（Z二三六―三三三a）。大虫は虎のこと。僧稠が山中で二虎の争っているのを引き分けた話（『統高僧伝』卷一六・僧稠伝）を踏まえつつ、具体的には現実の争い（例えば契丹と宋との抗争）をどう解決すればよいのかを問うものである。楊億は「澶淵の盟」の講和に一役買っている。「兩介」の「介」については（三四）の「這介」の注を見よ。

○以手作曳鼻勢曰……＝兩介の大虫の争いを、現に相対する当事者同士の抗争としてとらえ、元璉と対峙する楊億の挑戦的態度を押さえつけた。

○蹠跳＝ぴよんぴよんはねる。『睦州語録』、「一覺上座に問う、見説く、叢林裏に在りて、多口にして把不住らぬものとは、是れ閨梨なるや。覺云く、和尚は什麼處にて這箇の消息を得しや。師云く、蹠跳するに一任す。覺云く、語り得ざるべからず。師云く、吽吽、轉＝とう敗闕を見わす」。

○脱然＝病気が癒えて、さっぱりとするさま。韓愈〈答張籍書〉、「脱然として沈痾の體を去るが若し」。

○八角磨盤空裏走＝「古代印度の神話に見える武器の一つで、八角の尖りをもつグラインダー（研磨盤）が空中を旋

転して、一切のものを破砕する。すさまじい破壊力の喩え」（『禪語辞典』）。『円悟語録』卷一一、「未だ兜率を離れずして已に王宮に降り、未だ母胎を出でずして人を度すこと已に畢る。一往看來たれば却つて是なるも、子細に點檢し將ち來たれば、猶お両邊に滯る。殊に知らず、東弗于逮に馬を走らせ、南瞻部州に舞を作し、西瞿耶尼に拍を作り、北鬱單越に筋斗を翻つも、也た是も無く也た非も無し、也た得も無く也た失も無し。且く道え、畢竟如何。八角の磨盤空裏に走る」（T四七七一七六一b）。

『百伽陀』の訓註本（禪文化研究所編、平成六年、一三八頁参照）に従来の種々の解を挙げた後に、地獄の責め道具の一つである八本の輻を持つ鉄磨・鉄輪に同じであり、また鉄輪は仏勅の峻嚴にして魔を摧くに喩えられるものであり、仏説の象徴である法輪に同じであるとの解を出している。

○金毛師子變作狗ニ空中を疾駆する磨盤のすさまじさに、金毛の師子が狗になってしまった。禪に慢心していた己を自嘲的にいったものだろう。金毛師子は釈迦牟尼仏の前身の堅誓師子のこと。転じて秀れた人物、過量の禪者の喩え。『大方便仏報恩經』卷七、「一師子有り、名を堅誓と曰う。身毛金色にして大威武有り。力は千に適し、發聲哮吼すれば、飛鳥墮落ち、走獸隱伏す。一辟支佛の沙門の威儀清淨なるを見る。見已つて心に喜び、日々親近し、常に誦經し、微妙の法を説くを聞く。爾の時、大獵師有り。是の師子の身毛金色なるを見、心に歡喜を生じ、是の念を作すらく、『我れ若し此の師子を得て、其の皮を剥ぎ取り、國王に奉上せば、必ず爵祿を施し、七世に乏なる無し』。……即ち鬚髮を剃りて法服を被、思惟する所の如くす。還た山中に入りて一樹下に坐す。爾の時、堅誓師子、是の比丘を見て心に歡喜を生じ、騰躍して親附し、比丘の足を舐む。爾の時、獵師即ち之を射る。……既に毒箭を被むり、嗟喋哮吼し、前みて搏撮まえ、毀害せんと欲するに臨んで、復た是の念を作すらく、……是の故に我れ應に惡を起すべからず。……已にして即便ち命終る。（獵師は皮を剥ぎ、王國に奉上し、詳しく事を申し述べた）。

王、是の語を聞きて心に憂惱を生じ、……自ら宣言すらく、……我れ曾て智者よりは是の如き語を聞けり、若し畜獸の身毛金色なる有れば必ず是れ菩薩なり。……火を以て師子の皮骨を闡維し、舍利を收取し、塔を起てて供養す。佛、阿難に告ぐらく、諸の善男子よ、堅誓師子は今則ち我が身、釋迦文是れなり」(T四一四三八a-c)。

○擬欲藏身北斗中、應須合掌南辰後二不詳。「宇宙を主宰する位置にある北斗星にひそみたいなら、我が身の寿命を司る南極星の背後で礼拝してこそだ」とは、この己を礼拝してこそ宇宙の主宰者たる資格ができる、ということか。

「藏身北斗中」は、『雲門広録』卷上、「問う、如何なるか是れ透法身の句。師云く、北斗裏に身を藏す」(T四七—五四六a)を承ける。この句については、『禪語辞典』に「北斗は、あらゆる星座の統轄者と見なされた。天界を統べる天帝の乗る車であり、天帝はこれに乗って中央をめぐる四方を治め、陰陽を分け四季を立てる(『史記』天官書)。そこに藏れこむとは、全宇宙の主宰者たる位に昇つて、そこにひっそりと鎮まること」とある。北辰とは北極星のことであるから、南辰とは南極星のこと。南極老人と言われ、人の寿命を司る星。張守節『正義』、「老人の一星は、弧〔星〕の南に在り。一に南極と曰う。人主は壽命延長の應を占う爲に、常に秋分の曙を以て景を見、春分の夕に丁みなみを見る。見れば國長命なり、故に之を壽昌と謂い、天下安寧なり。見ずんば、人主憂うなり」。『伝灯録』卷二九・玄沙の頌、「箇中の意を識らんと欲せば、南星は眞の北斗なり」(T五一—四五三b)。

○典故について二嘉靖十年智異山鐵窟開刊本は『普灯録』と明記する。いま『嘉泰普灯録』卷二三の楊億章をベースにして、『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

文公楊億居士、字大年。幼舉神嬰、及壯負才名、而未知有佛。一日過同僚、見讀金剛經、笑且罪之。彼讀自若。公疑之曰、是豈出孔孟之右乎、何佞甚。因竊閱數板、惘然始少敬信。後會翰林李公維、勉令參問。及由秘書監、出守沙州。首至廣慧、謁元璉禪師<sup>②</sup>。璉接見。公便問、布鼓當軒擊、誰是知音者。璉曰、來風深辨。公曰、恁麼則禪客相逢、只彈指也。璉曰、君子可入。公應喏喏。璉曰、草賊大敗。夜

語次、璉曰、秘監曾與其人道話來。公曰、某曾問雲巖諒監寺、兩箇大蟲相齧時如何。諒曰、一合相。某曰、我只管看。未審恁麼道、還得麼。璉曰、這裏即不然。公曰、請和尚別一轉語。璉以手作拽鼻勢曰、這畜生更踣跳在。公於言下、脫然無疑。有偈曰、八角磨盤空裏走、金毛師子變作狗。擬欲將身北斗藏、應須合掌南辰後。復杼其師、承密證。寄李維翰林。(Z一三七—一五七c)

大字は共通する文字、小字は『普灯録』にのみ見える文字。

- ①楊十(文公)(宝蔵) ②元||廣惠(宝蔵) ③日||問(宝蔵) ④箇||介(宝蔵) ⑤齧||咬(宝蔵)  
⑥拽||曳(宝蔵) ⑦將||藏(宝蔵) ⑧藏||中(宝蔵)

〔七九〕清獻公趙抃

清獻公趙抃、嘗典清州。政事之暇、多宴坐。忽大雷震驚、即契悟。作頌曰、默坐公堂虛隱机、心源不動湛如水。一聲霹靂頂門開、喚起從前自家底。

\*

清獻公趙抃、嘗て清州に典たり。政事の暇、多く宴坐す。忽ち大雷震驚するや、即ち契悟す。頌を作りて曰く、「公堂に默坐し虚にして机に隱れば、心源動せず湛として水の如し。一聲の霹靂頂門開き、從前の自家底を喚起す」。

清献公趙抃は昔、清州知事に任じていたとき、政務の余暇は、宴坐にあけくれた。あるとき大雷電に目をさまし、忽然と悟りをひらく。頌をつくつていうのに、

默然と役所（の椅子）に坐し、無心に机によりかかっていると、心は根っから動かず、湛々たる水そのもの。霹靂一声、頭の上に雷がおちて、昔ながらの自分自身をよびさました。

\*

\*

○趙抃一〇〇八一—一〇八四。字は閱道、号は知非子、高齋居士。衢州西安（浙江省衢県）の人。景祐の初め（一〇三四）殿中侍御史となり、高位の者も恐れずに弾劾したので、人々は彼を鉄面御史と呼んだ。益州路の転運使、天章閣待制、河北都転運使を歴て龍図閣直学士に登り、成都の知事となり善政を布く。神宗に抜擢されて参知政事となるが、王安石と合わず、左遷され、青州の知事を歴て、再び成都の知事となり、不穏な動きを見せていた辺境の兵士たちを撫慰した。七十二歳で太子少保となり郷里に帰って隠居す。元豊七年（一〇八四）七十七歳で卒した。清献と諡され、太子少師を贈られる。『趙清献集』十卷がある。『宋史』卷三二六、『東都事略』卷七三。四十歳を超えて、宗教に関心をもち、ちょうど蔣山法泉が衢州の南禅に住したので教えを受けた。後に青州に知事となったとき、この話の如く雷鳴を聞いて悟入し、法泉の法を嗣いだ。また禅門語録を萃め、拈じて頌した『拈古頌』百篇がある。『羅湖野録』上、『普灯録』卷二三、『人天寶鑑』、『五灯会元』卷一六、『居士分灯録』卷下、『先覚宗

乘』卷二、『仏法金湯篇』卷一二、『居士伝』卷二一。

蔣山法泉は雲門下五世。泉万巻とあだ名された。俗姓は時氏、随州随県（湖北省）の人。幼くして儒学を修学し、長じて龍居山智門院信圀に依りて出家し、試経得度の後、遠く雲居舜禪師の法席に行く。二祖礼拝の因縁を示され、答えようとしたところ、口を塞がれて頓悟した。初め大明・千頃・靈巖・蔣山の五寺に住し、蔡卞（一〇五八―一一一七）・趙抃が問法した。後、詔勅により大相国寺智海禪院に住す。紹聖元年（一〇九四）左遷されて英州（広東省英徳県）へ行く途中の蘇東坡と偈頌の応酬を行い（『羅湖野録』下、Z一四二―四九一d、四九二a）、世の無常を説いた詩「北邙行」（『雲臥紀譚』下、Z一四八―一二二a）がある。「悼趙清猷」を作っている、「仕うる也邦に憲たり、歸する歟世に程と作る。人間より金粟去り、天上に玉樓成る。慧劍は織も缺く無く、冰壺は徹底清し。春風は水路に穀し、孤月は雲を照して明し」（『宋詩紀事』卷九二）。『建中靖国統灯録』卷九、『聯灯会要』卷二八、『五灯会元』卷一六。

○清州 河北省青県。『読史方輿紀要』によれば、宋の大観二年に乾寧県を改め、清州としたとある。大観二年は一〇八年で、趙抃の死後である。『宋史』三一六の趙抃伝では、神宗のとき青州（山東省益都県）に知となったことを記し、他の全ての資料も青州とする。清州とするのは『禪門宝蔵録』の撰者の誤り。青州が正しい。

○宴坐 安禪、坐禪のこと。『維摩経』弟子品、「我れ昔、曾て林中に於て樹下に宴坐す。時に維摩詰來たりて我に謂いて言わく、唯だ舍利弗よ、必ずしも是れ坐を宴坐と爲すにあらず。夫れ宴坐とは、三界に身意を現わさず、是れを宴坐と爲す。道法を捨てずして凡夫の事を現わす、是れを宴坐と爲す。心内に住せず亦た外に在らず、是れを宴坐と爲す。諸見に於て動ぜずして三十七品を修行す、是れを宴坐と爲す。煩惱を斷ぜずして涅槃に入る、是れを宴坐と爲す。若し能く是の如く坐す者は、佛の印可する所なり」（T一四一五三九c）。

- 忽大雷震驚、即契悟ニ大地を震わす雷音を聞いて大悟した人は、この話以外に、黄龍死心悟新（一〇四三―一一二四）に例がある。『雲臥紀譚』「雲臥菴主書」に、悟新が杖声によって大悟したという『続僧宝伝』の説を批判し、吉州禾山方和尚が福唐の祖一書記に編せしめた「死心行状」を引いて言う、「行状に則ち謂う、初め晦堂に黄龍に謁し、九載閲し、一夕燕坐して微やや困ずるに、雷の大きい震うを聞き、廓然と契悟す」（二四八―二五b）。
- 作頌曰……『羅湖野録』上では、次のような頌に作る。「公堂を退食し自ら几に凭れば、不動不搖にして心は水に似たり。霹靂の一聲頂門を透り、従前の自家底を驚起す。頭を蒼蒼蒼蒼に擧げ喜び復た喜ぶ。刹刹塵塵是ならざる無し。中下の人は聞くを得ず。妙用神通するのみ」（二四一―二四八―a）。
- 默坐ニ『緇門警訓』卷六「開善密菴謙禪師答陳知丞書」、「某啓す、欣おどろみて審らかにす、官舎多く暇あらば、香を焚き靜かに默坐して此の道を進めよ、何の樂しみか之に如かん」（二四八―一〇七三a）。
- 公堂ニ官署の庁堂。賈島「酬姚合校書」之詩、「公堂に朝に共に到り、私第に夜に相留る」（『全唐詩』五七三）。
- 虚ニ虚心の意。『莊子』人間世第四、「唯だ道は虚に集まる。虚とは心齋なり」。
- 隱机ニ肘掛けにもたれる、隱几に同じ。『莊子』齊物論第二、「南郭子綦、几に隱りて坐し、天を仰いで嘘す」。
- 心源ニ自性清淨心、心性。心は一切万物の源であることから名づけられる。『大乘起信論』、「心源を覺するを以て、故に究竟覺と名づく。……心性を見るを得ば、心は即ち常住して究竟覺と名づく」（二三一―五七六b）。馬祖云く、「一切法は皆な是れ心法なり、一切名は皆な是れ心の名なり。萬法は皆な心より生ず。心は萬法の根本爲り。經に云く、心を識りて本源に達す、故に號して沙門と爲す」（『伝灯録』卷二八、二五一―四四〇a）。
- 一聲霹靂頂門開ニ一声の大雷鳴に頭のとっぺんがぼかりと割れた。「頂門上具一眼」（『碧巖録』四四・本則の著語、二四八―一八〇c）とか、「爍迦羅眼頂門開」（『円悟語録』卷三、二四七―二六b）といわれるように、頭の頂上に

第三の眼が開いたことをいうのではなからう。

○従前自家底〓「これまでの自分のもの」とは、父母未生前の本来の自己。

○典拠について〓嘉靖十年智異山鐵窟開刊本は、『普灯録』と明記する。そこで、『嘉泰普灯録』卷二三の趙抃章をベースにして、『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

清獻公趙抃居士、字悦道。年四十餘、擯去聲色、系心宗教。會佛慧法泉禪師號泉萬卷、來居衢之南禪。公日親之、泉未嘗容措一詞。後典青州、政事之餘、多宴坐。忽大雷震驚、即契悟。作偈③曰、默坐公堂虛隱几、心源不動湛如水。一聲霹靂頂門開、喚起従前自家底。泉見笑曰、趙悦道撞彩耳。(Z一三七—一五八b)

大字は共通する文字、小字は『普灯録』に見える文字。

①青〓清(宝蔵) ②餘〓暇(宝蔵) ③偈〓頌(宝蔵) ④几〓机(宝蔵)

### 〔八〇〕 歐陽脩

歐陽脩字永叔、號六一居士。公慕韓退之、將排釋教、文未成。一日謁浮山遠禪師、心有異之。從而與客弈碁、遠坐其傍。公遽收局、請因碁說法。遠搥鼓升堂。乃曰、若論此事、如兩家著碁相似。何謂也。敵手知音、當機不讓。若是綴五饒三、又通一路始得。有一般底、只解閉門作活、不解奪角充關、硬節與虎口齊彰、局破後徒勞運斡。所以道肥邊易得、瘦肚難尋。思行則往往失粘、龜心而時時頭撞。休誇國手、謾說神仙。贏局輸籌即不問、且道黑白未分時、一著落在什麼處。良久云、従前十九路、迷悟幾多人。公嘉歎久之、從容謂同僚曰、脩初疑禪語爲虛誕、爲記憶胸中、以誘其流俗。今見此老機緣、所得所造、非悟明於心地、安能有此妙旨哉。公於禪宗、默有所契。

禪苑聯芳



\*

歐陽脩、字は永叔、六一居士と號す。公は韓退之を慕い、將に釋教を排せんとするも文末だ成らず。一日、浮山遠禪師に謁し、心に之を異とすこと有り。從而に客と弈碁するに、遠其の傍に坐す。公遽かに局を收め、碁に因りて說法せんことを請う。遠、鼓を搥たしめて堂に升る。乃ち曰く、「若し此の事を論ぜば、兩家の碁を著つが如きに相似たり。何の謂なるや。敵手知音なれば、機に當りて譲らず。若し是れ綴五饒三ならば、又た一路を通じて始めて得し。一般底有り、只だ門を閉ざして活を作さんことを解して、角を奪つて關を充くを解せず、硬節と虎口と齊しく彰わるも、局破れて後に徒らに運斡を勞すのみ。所以に道う、肥邊は得易く、瘦肚は尋ね難し、と。行んと思わば則ち往往に粘を失れ、麤心にして時時に頭撞く。國手を誇り、謾りに神仙と説うを休めよ。羸局輸籌は即ち問わず、且く道え、黑白未だ分かたざる時、一著什麼處に落在す」。良久して云く、「從前の十九路、迷悟幾多の人ぞ」。公、嘉歎すること之を久しくし、從容として同僚に謂いて曰く、「脩は初め禪語を疑いて虚誕と爲し、爲に胸中に記憶し、以て其の流俗を誘わんとす。今、此の老の機縁を見るに、得る所造る所、心地を悟明するに非ずんば、安ぞ能く此の妙旨有らんや」。公は禪宗に於て、黙して契う所有り。

禪苑聯芳

\*

歐陽脩は永叔と字し、六一居士と号した人。公は（唐の）韓退之に倣つて、仏教を排撃しようとしたが、まだ文章がまとまらない。

ある日、浮山の遠禪師におめにかかり、胸の中でオヤと思つたが、従容として相客と碁をさしていた。遠は傍に来て坐つた、公は急いで碁盤をかたづけ、碁に困む説法を求めた。

遠は型通りに太鼓をうたせ、法堂に上つた。

仏法の大事をいうなら、名人が碁をうつようなもの。何故なら、お互いに手のうちが判つて、急所を見逃さん。たとえば五目のうち、三目勝つても一手先を見通して始めて勝てる。並の碁打ちは、守りを堅めて生きるだけで、(相手の)角を奪つて閑に充て、節を硬めて虎口をととのえることができず、負けと決してはじめて幹運をあせる。言ってみれば、太つたのは簡単、瘦せたのは難しい。打とうとして駒がさせず、気が荒れて突きすすむ。老練な医者、神仙の話に時を忘れ、勝ち力士は手柄話は求めぬものだ、考えてもみよ、白黒の別見えぬ時、最初の石を何処におくかだ。

しばらく黙して、

すぎこしの十九曲りを、人はみな迷つて悟つただけのこと。

公は賞嘆おくあたわず、従容として同僚に語りかけた、

脩(わたし)は昔、禪の話はウソだと思ひ、胸中に蓄えて俗物をだましてきたが、今、この老人の機縁をみると、その到り得たものは、本来の心を悟ることなしに、どうしてこれほどの妙処を突けようか。

公は禪宗というものに、黙っていてびたりとゆくところがあった。

\*

○歐陽脩 一〇〇七—一〇七二。字は永叔、自ら醉翁と号す。廬陵(江西省吉安県)の人。四歳にして父を亡くし、母

の手で教育される。貧しいため荻を筆にして地面に画いて書を学んだ。天聖八年（一〇三〇）首席で進士に及第し、西京留守推官となる。慶曆四年（一〇四五）、杜衍・韓琦・范冲淹・富弼らが党議のために辞職し、陽脩は上書して朋党を弁護して滁州（安徽省滁県）に左遷され、揚州・潁州の地方官を歴任した。至和元年（一〇五四）に翰林学士に召されて『唐書』の修撰に当り、嘉祐五年（一〇六〇）に成り、礼部侍郎・翰林侍讀学士となる。枢密副使より、翌年に参知政事となり、韓琦と協力して仁宗を補佐した。王安石の青苗法に反対し、熙寧四年（一〇七二）太子少師を以て至仕す。翌年（一〇七二）七月に卒す。年六十六。文忠と諡さる。「滁に在りて自ら醉翁と號す。亭を琅琊山に作り、醉翁を以て之を名づく。晩年に六一居士と號して言う、吾れ集古録一千卷、藏書一萬卷、琴一張有り、碁一局有り、而して嘗に酒一壺（鶴一雙）を置く。吾れ其の間に老ゆ。是れを六一と爲す」（『東都事略』卷七二）。

『新唐書』 『新五代史』の編集の他、『毛詩本義』 『集古録』 『帰田録』 『居士集』 『六一詩話』等の著書があり、『文忠公集』 一百五十三卷にまとめられている。『宋史』 卷三一九、『宋元学案』 卷四。『宋人伝記資料索引五』（鼎文書局） 三七八八頁に略伝と伝記資料が網羅されている。

韓退之に傾倒し、排仏家として知られる。退之の「原論」に倣って「本論」を著わし排仏を強調した。しかし、晩年は六一居士と号したように仏教に心を寄せた。禪者と関わりを持つようになるのは、一〇四五年に滁州に左遷されたときからであろう。浮山法遠の他に瑯琊慧覚、雲門宗の円通居訥などと交った。仏教側の記録としては、『林間録』 上、『先覚宗乘』 卷四、『仏法金湯篇』 卷一二がある。

○公慕韓退之 Ⅱ 『宋史』 卷三一九歐陽脩伝に言う、「〔歐陽〕脩、隨に遊び、唐の韓愈の遺稿を廢書の籠の中より得、讀みて心に慕う。苦志して頤を探り、寢食を忘ずるに至る。必ず轡を并べて絶馳せんとし、追いて之と並ばんと欲す」。当時既に希少で手に入らぬ韓愈の文集を校定して作文の手本とし、平明で質素な文章を作ること呼びかけ、

以後の散文の方向を決定するに到った。

○浮山遠禪師 九九一—一〇六七。円鑑禪師。緯は法遠、鄭州（河南省）の人、俗姓は王氏。十九歳のとき并州（山西省陽曲県）に遊び、三交智高禪師（嗣首山省念）に出会い、出家して具足戒を受けた。後、汾陽善昭・葉県帰省に参じ、皆な印可を得た。天禧中（一〇一七—二一）、郢州（湖北省鍾祥県）大陽山の警玄禪師（九四三—一〇二七）に謁し、機語相契い、皮履と直褌とを与えられ、後事を託された。天聖中（一〇二三—一〇三三）滁州（安徽省滁県）の瑯琊覺禪師の推挙で、許式の請により舒州（安徽省懷徳県）の太平興国寺に出世し、葉県省の法嗣なるを明らかにした。慶曆三年（一〇四三）、天柱山月華庵に逸居したが、同六年（一〇四六）に呂濟叔が浮山に延致した。欧陽脩はこのときに見したのであろう。一〇五三年、姑蘇（江蘇省呉県）天平山に住し、至和中（一〇五四—五六）に浮山に帰る。晩年は会聖巖に隠退し、禪宗の教義を述べた「九帯」を作った。また、投子義青（一〇三一—一〇八三）を接し、大陽警玄から託された洞上の宗旨を継がしめた。治平四年（一〇六七）、七十七歳を以て示寂す。但し『仏祖歴代通載』は、皇祐元年（一〇四九）卒、年七十余とする。『禪林僧宝伝』は、若かりしとき、達觀曇顥、薛大頭らと蜀（四川）に遊んだとき、危難に遭つたが法遠の機智によつて逸れ、法遠が役所の事務に明るいため遠録公とあだ名したといふ逸話を載せる。『統灯録』卷四、『聯灯会要』卷一三、『普灯録』卷二、『禪林僧宝伝』卷一七、『五灯会元』卷一二、『雲臥紀譚』卷上、『仏祖歴代通載』卷一八に略伝及び問答語句がある。

「浮山」は、『大明一統志』卷一四「安慶府」にいう、「浮山は桐城県東九十里に在り。一名浮渡山。上に三百五十巖・七十二峰有り。其の中に居るべく遊ぶべき者は三十六。西南に獨峰有り、直上千仞、大江環繞とりまき、これを望めば浮くが若し、故に名づく」。

○從而 連詞。しかる後、因りて。『大明高僧伝』卷三・釈居敬伝、「杭州集慶寺の東源法師に参じ、懺摩堂に於て

第一座に居す。從而て周易を講ず」(T五〇—九二〇b)。

○敵手〓碁で力量伯仲の對手。『晋書』卷四九・謝安伝、「〔謝〕安は常に碁は〔謝玄に〕劣る。是の日、玄は〔兵の至らんことを〕懼れ、便ち敵手と爲り、又た勝たず」。『碁経』雜説にいう、「凡そ碁に敵手有り、半先有り、兩先有り、桃花五有り、北斗七有り」(『叢書集成新編』五四、『説郛』弓一百二)。

○知音〓知己、同志。ここでは己の碁の手の内をよく見抜く者。『列子』湯問篇の伯牙と鍾子期の次の故事による。「伯牙は善く琴を鼓で、鍾子期は善く聽く。伯牙琴を鼓くに、志は高山に登るに在り。鍾子期曰く、善い哉、峩峩として泰山の若し。志は流水に在れば、鍾子期曰く、善い哉、洋洋として江河の若し。伯牙の念う所、鍾子期、必ず之を得たり」。

○當機不讓〓互角に勝負する。『論語』衛靈公篇、「仁に當りて師に讓らず」を応用した言い方。「當機」は、面と向い合つてわたりあう。『伝灯録』卷八・浮盃和尚章、「機に當りて直面に提し、直面に機に當ること疾し」(T五一—二六三a)。

○若是綴五饒三、又通一路始得〓道忠『五家正宗賛助策』卷七の浮山円鑑章、「舊解に曰く、圍碁は下手をして先に三著或は五著を下さしむこと、∴或は∴の如し。此れを綴五と謂い、又た饒三と謂う」(禪文化研究所基本典籍叢刊本、三三二頁)。つまり、「綴五饒三」は伎量のへだたる度合に應じて五著或は三著先に石を布置することと解している。この説は『禪学俗語解』(禪文化研究所編『禪語辞書類聚』所収、一九九一年)にも採られる。道忠は「饒三」が、旧解に言われるような意味であることを典拠を示して証解しながら、次のように自らの解を述べる。「予が饒の字を證解すること右の如し。然れども今の語は必ずしも之に拘るべからず。古より綴五饒三を解する者は未だ句の本意を得ず。今言わば、未だ子を下さざるときは則ち已むなし、若し纔に子を下して五著三著に到らば則ち須ら

く活路を通じて外に出でて始めて得べし。下の只解閉門作活等と相反すれば則ち瞭然として見るべし。底の理は須く是れ活漢にして始めて得べしを謂う」（禪文化研究所編基本典籍叢刊『五家正宗贊助策』上、三三二頁、一九九一年）。『中文大字典』には、「碁法遊戲の一種。俗に五綴棋（五子棋）と稱す。先に五子を連綴して列を成ずる者が勝と爲る。故に三子列を成ずる時は尚お之を饒す。四子連なる時は必ず退けて之を殺し、五を綴ること能わざらしむ」とあり、五目並べのことをいうが、囲棋の話なので、この説はここでは当たらない。

「路」は『碁経』に言う、「夫れ萬物の數は一より起る。局の路は三百六十有一なり。一とは、數を生ずるの主にして、其の極に據りて四方に運る。三百六十は以て周天の數に象り、分かれて四隅と爲り、以て四時を象る。隅ごとに各の九十路、以て其の日を象る。外周は七十二路、以て其の候に象る。夫れ棋は三百六十の黑白相い半ばし、以て陰陽に法る。局の線道を秤と謂い、線道の間を罫と謂う」とあり、棋盤の目のことをいう。「通一路」とは、「綴五饒三」のうえに更に一目許してやる（一手まけてやる）ことだろう。

○閉門作活 〓 『囲棋義例』にいう、「門とは閉なり。これを閉ざして出ずるを得ざらしむを門と曰う。一路を隔つを行門と曰い、二路を（隔つを）大門と曰う」（『叢書集成新編』五四、『説郛』易二百二）。ここでは自らの陣地の門を閉ざして（即ち目を作り）活きようとする事。

道忠曰く、「亦た是れ義例の釋名に拘るべからず、言うところは、外に出でずして但だ内に在りて活を作すなり。小見を守るに比<sup>な</sup>う、鬼窟裡に坐在すなり」（『五家正宗贊助策』三三二頁）。

○奪角 〓 『五家正宗贊助策』浮山円鑑章、「忠曰く、角とは局の四角なり。焦竑『石室秘傳』に『侵角の勢有り』と、是<sup>これ</sup>なり」（三三二頁）。

○充關 〓 『囲棋義例』にいう、「關。隘なり。兩子正に相い對して立つ者、これを關と謂う。單關・雙關の名有り」。

日本では「一間とび」と言われる。充は衝と音通。『続灯録』『五灯会元』は「衝關」、『禪林僧宝伝』は「冲關」（但し五山版は「衝關」）。「冲」は『囲棋義例』に、「突なり。直に子を連ねて關に入る、これを冲と謂う」とある。

道忠曰く、「敵、我を圍む、關隘の處は外に出ずるを得べからず。而るに却つて能く衝破して活きる者なり。奪角衝關を會せざる者は祖師の活法を得ず」（『五家正宗賛助桀』三三三頁）。

○硬節與虎口齊彰〓「節」は『囲棋義例』に、「打。撃つなり。其の節を撃つを打と曰う。」とあり、吳清源解説『玄碁経集』（東洋文庫三八七、五三頁）には、「節」を「ふしめ」と訳され、図が示されている。これからすれば「節」とは $\therefore$ であり、「硬節」とはこれが連続していることか。道忠（『五家正宗賛助桀』）は『眠寤集』を引き、 $\therefore$ を硬節とする。『禪学俗語解』もこれを承ける。待考。

「虎口」は『囲棋義例』に「筈。札なり。若し兩虎口の相い對する者有らば、夾みてこれを札し、復殺有らしむ」とある。吳清源前掲書の解説では、「札である。双方の虎口（いわゆるラツパの形）が相對しているようなとき、夾んでこれを札し、また取り返せるようにするのである」（前掲書五一頁）とあり、図が示されている。

道忠は、「下手は但だ自ら全うすることを守りて活路を求めず、則ち敵既に硬節虎口の勢成りて出ざるを得ず、亦た全きことを得ざるなり。硬節虎口は蓋し破るべからず畏るべきの子勢のみ。齊彰の兩字を看よ、即ち下手を形容するなり。敵子已に圍を成じ了りて始めてこれを覺知するを言う」（『五家正宗賛助桀』卷七、三三三頁）と解している。

○徒勞運幹〓「運幹」は、めぐりめぐらす意。『禪林僧宝伝』は「連幹」、『続灯録』は「綽幹」、『五灯会元』は「綽幹」に作る。『囲棋義例』に言つ、「幹。間なり。子を以てこれを間てを謂いて、幹と曰う」「綽。侵なり。

我が子を以て彼の子の路を斜めに侵して、ここを出でんと欲するを綽と曰う」。

道忠曰く、「已に負墮して後、或は綽或は幹（幹）すると雖も、益す輸を取るに足る、何ぞ活路を得る有らん。生死到來するに臨みて、七顛八倒するも益無きなり」（『五家正宗賛助桀』卷七、三三三頁）。

○肥邊易得、瘦肚難尋 〓 「辺では大きな地を占めることは（下手でも）易しいが、肚（中央）では小さな地を占めることさへ難しい」。『碁経』合戦篇に「博奕の道は謹嚴を貴ぶ。高き者は腹に在り、下なる者は邊に在り、中なる者は角を占める。此れ碁家の常なり」、また雑説篇には「夫れ碁の邊は角に如かず、角は腹に如かず」とあるように、腹（肚）に場所を占めることが肝要なのであり、高者（上手）はそれを実行し、下手は辺、中級者は角を占めるといふ。腹に場を占めることは最も難しいが、そこにこそ勝負のポイントがあり、下手は辺に於て勝つことのみならず、腹での難しい勝負を捨ててしまっていることを言うのであろう。

道忠曰く、「局の四邊に地を占めることは肥大なりと雖も得易し、肥は濶大なり。局の中央に地を占めることは瘦小なりと雖も得難し、瘦は狭小なり。底理は、論辯洪大なることは則ち得易し、之を中心に得ることは却つて難し」（『五家正宗賛助桀』、三三四頁）。

○思行則往失粘 〓 行ようとばかりに気を取られて却つて粘ことを忘れてしまう。下手の碁を言う。「行」は『囲棋義例』に「行なり。子を連ねて下すを行と曰う。粘連して断たれざるの緒なり」。同じく「粘」は「連なり。彼、子を以てこれを断たんと欲す。我れ即ち子を以てこれを連ならせるを粘と曰う」。

道忠曰く「修行して程を貧るは却つて綿密の處を欠き易きなり」（『五家正宗賛助桀』、三三四頁）。

○鹿心 〓 集中力を欠いた状態。注意力散漫。綿密さを欠くこと。『万善同帰集』卷中、「善く正法に達するに非ずんば、須らく親しく諦を見て言行相應すべし。但だ妄語鹿心を縦にして、豈に潛行蜜用を察せんや」（丁四八―九九二



b)。

○頭撞＝『囲棋義例』にいう、「頂、撞なり。我彼の子いし、同路にして直に撞ぶつかる、これを頂と謂う」。

○國手＝名人。『西陽雜俎』卷一二・語資、「一行は本と奕棋を解せず。燕公の宅に會するに因りて、王積薪の棋一局を觀る。遂にこれと敵あいてする。笑いて燕公に謂いて曰く、此れは但だ先を争うのみ。若し貧道が四句の乗除の語を念ずれば、人人國手爲り」。

○贏局輸籌＝勝ちと負け。『碁経』雜説、「勝ちて路多きを名づけて贏局と曰い、敗れて路無きを名づけて輸籌と曰う」。

○十九路＝十九條の平路、即ち棋面の縦に十九本、横に十九本ある枰線のことであろう。裴説「棋」の詩、「十九條の平路、平なりと言うも又た嶮けわし。人心は算はかる處無く、國手も輸まくる時有り。勢迴はるかにして流星遠のき、聲乾き雹を下らすこと遅し。軒に臨みて才かに一局、寒日又た西に垂る」。

○從容＝ゆったりと談笑するさま。謝玄暉「拜中軍記室辭隋王牋」にいう、「東のかた三江を亂わたり、西のかた七澤に浮び、戎旃に契闊し、讌語に從容す」(『文選』卷四〇)。

○機縁＝弟子を教え道く語句・作略のこと。『五灯会元』卷五・清平山令遵章、「初めて翠微に參じて便ち問う、如何なるか是れ西來的の意。微曰く、人無きを待ちて即ち汝に説かん。師良久して曰く、人無きなり、請う和尚説け。微、禪牀を下り師を引ききて竹園に入る。師又た曰く、人無きなり、請う和尚説け。微、竹を指さして曰く、この竿は得かく恁くも麼も長く、那の竿は得かく恁くも短かし。師は其の微言を領すと雖も、猶お未だ其の玄旨に徹せず。出でて大通に住す。上堂して初めて翠微に見ゆるの機縁を擧し、衆に謂いて曰く、先師は泥に入り水に入りて我が爲にす、是れより我れ好惡を識らず」(Z一三八一―九四d)。

○悟明かみや 開悟明達。『山菴雜錄』卷上・径山本源和尚、「心地を悟明し、力めて大法を荷うに至りては、杲日の天に麗かき、疾電の地を震わすが如し。含識の流、其の照燭警發を受けざるもの無し」(Z一四八一―七二一c)。

○禪苑聯芳ぜんえんれんぱう 〓『釈氏通鑑』の採摭経伝録の一つとして名が見え、卷一一「乾寧丁巳(八九七)」の条に「趙州示滅」、卷一二「乾祐庚戌三年(九五〇)」の条に「呉越王錢氏の問法」について『禪苑聯芳』を引いているが、現在逸書となっており、詳しいことは不明である。

○典拠について 〓『禪苑聯芳』と明記されている。他にこの話を録すものとしては、『続灯録』卷四、『禪林僧宝伝』卷一七、『五灯会元』卷一一、『五家正宗贊』卷二の浮山章がある。『続灯録』は上堂語を録すのみで欧陽脩は登場しない。『禪林僧宝伝』『五家正宗贊』は欧陽脩の参謁・上堂語を録すが、「文忠嘉歎久之」までで、同僚に語るところがない。『五灯会元』は同僚に語るところまでであるが、「公於禪宗、默有所契」はない。欧陽脩が法遠に謁したときに、『禪林僧宝伝』『五灯会元』『五家正宗贊』では「未有以異之」とあるが、『宝蔵録』は「心有異之」となっているところが、内容上の最も大きな違いである。

### 〔八一〕 丞相王隨居士

丞相王隨居士、嘗謁首山省念禪師、得言外之旨。自爾踐履益深、竟明大法。至臨終日、書偈曰、晝堂燈已滅、彈指向誰説。去住本尋常、春風掃殘雪。

\*

丞相の王隨居士、嘗て首山省念禪師に謁し、言外の旨を得る。爾れ自り踐履益す深まり、竟に大法を明らむ。臨終の日に至つて、偈を書きて曰く、「晝堂燈已に滅す、彈指誰に向つてか説かん。去住は本とより尋常、春風殘雪を掃う」。

\*

総理の王隨居士、昔、首山の念禪師におめにかかり、教外の宗旨を把んで、自から深く日常に生かして、完全に仏法をものになされた。

臨終の日になつて、次のような遺偈を書かれた、

公共のホールの灯火は、すでに消えた、

指をはじいて（ノックする）、誰に告げたものか。

行くも留まるも、どちらもよからう、

春風が消えのこりの雪を除く。

\*

○王隨ニ字は子正、河南（河南省洛陽）の人、進士甲科に登第。官は仁宗のとき、門下侍郎・同中書門下平章事となる。一年後、罷めて彰信軍節度使として河陽（河南省孟県）の知事となった。卒して中書令（丞相）を賜わった。章

恵と諡され、後に文恵に改む。『宋史』卷三一一、『東都事略』卷五六。応天府（河南省商邱県）の知事になったとき、真宗に「隨の南京を治めること太だ寛たり」と言われ、王旦に「隨は事に臨んで汗漫、以て彈圧すること無し」と批判されている。潤州（江蘇省）に知となったとき、大饑饉があり、転運使はわずかしか常平倉の米を放出せず、物価が高騰したため、官粟を出させて物価を安定させた。これらのことから、穏やかで人情に厚い人柄ではあったが、政治的には寛大にしすぎて放漫になりがちであったようである。裴休の人と為りを慕ったが、「風跡は違ふなし」と評される。首山省念の他には、錢塘の興教寺洪寿（九四四—一〇二二）と親交があった。『伝灯録』三十卷の精華を採り、十五卷に刪定した『伝灯玉英集』の編者として知られる。『嘉泰普灯録』卷二二、『五灯会元』卷一一、『仏法金湯篇』卷一一、『居士分灯録』卷上、『先覚宗乘』卷三、『居士伝』卷二一。

○首山省念 九二六—九九三。臨濟下四代目の法孫。姓は狄、萊州（山東省掖県）の人。幼くして家を棄て、本郡の南禅寺で受業し、遍ねく叢林に遊ぶ。常に頭陀行を修し、法華經を誦していたので、念法華と呼ばれた。後、汝州の風穴延沼に参じたとき、見いだされてその法を嗣ぎ、汝城の外、荒遠の処に在った首山に住し第一世となる。其の門に登る者は、皆な叢林精練の衲子にして、念は必ずこれを勘驗し、留まる者は纔かに二十余輩であったが、世の人が法席の冠たるを称するときは必ず首山を指した。『伝灯録』卷一三、『天聖広灯録』卷一六、『建中靖国続灯録』卷一、『禅林僧宝伝』卷三、『林間録』上、『聯灯会要』卷一一、『五灯会元』卷一一等に略伝と問答語句を収める。また『首山省念語録』（『古尊宿語要』、又『古尊宿語録』卷八所収）がある。

○言外之旨 一「以心伝心、教外別伝」の禅旨。『従容録』第六九則の本評、「南泉は初め律を習い、次に華嚴楞伽を聴き、中百門觀に入る。馬祖は言外の道を傳うと聞き、屢ば其の旨を扣き、頓に筌を忘ずるを獲たり」（丁四八一—七〇b）。『五灯会元』卷一八・文定公胡安国章、「文定公胡安国章庵居士、字は康侯。久しく上封（秀禪師）に依

りて、言外の旨を得たり」(Z二三八―三五六d)。

○自爾ニそれより。『水経注』湊水、「東江又た東して利水と合す。……名づけて韶石と曰う。古老言わく、昔二仙有り、分かれて之に憩そう。爾それ自より年みのり豊おくして、一紀を彌へ歴る」。

○踐履ニおこない。『林間録』卷下、「南禪師、積翠に居す時、一夕燕坐するに、光、屋廬つらなに屬る。侍に誠むらく、外に言う勿れと。高明教は既に化す、之を火浴するに、頂骨眼睛、齒舌耳毫、男根數壞珠皆な壞れず。世尊の『比丘の生身壞れず、無垢の智光發するは、善根功德の力、如來智見の力なるが故に行住坐臥かたちは須かず内外清淨なり』と云うが如し。彼の二大老は乃ち今の耳目の接する所にして異世のことに非ず。而るに獨爾殊勝なるは平生の踐履の明驗に非ずや」(Z一四八―三三三a)。

○畫堂ニ絵の画いてある豪華な室。『漢書』卷九八・元后伝、「甘露三年、成帝を甲館の畫堂に生む、世嫡の皇孫爲り」。崔顥「王家少婦」之詩、「十五にして王昌に嫁ぎ、盈盈と畫堂に入る」(『全唐詩』一三〇)。また『緇門警訓』卷九「古徳渴熱行」に、人々のなりわいの苦しみをよそ目に、安樂な僧侶の生活を批判して次のように言う、「耕さずして食い、蠶せずして衣る。屋に畫堂虚室有り、浴に清流曲池有り」(T四八―一〇八九c)。

○彈指向誰説ニ彈指は、親指と人差し指をはじいて音を出すこと。その場の状況によつて種々の意味を持つ。『四分律刪繁補闕行事鈔』卷下之三・計請設則篇第二三に、「増一〔阿含經〕に云く、如來は請を許すに或は默然たり、或は頭を儼あぐ、或は彈指す」(T四〇―二三五b)とあるのは、許諾の意。また『同』・道俗化方篇第二四に、「〔大比丘〕三千威儀に云く、他の房に入らんとするに、一に外より彈指す」(T四〇―一三八c)とあるのは、入室・訪問の合図であり知らせである。『高僧伝』卷一二・釈慧慶伝、「出家して廬山に止まり、學びて經律に通ず。清潔にして戒行有り。法華・十地・思益・維摩を誦し、夜毎ごとに吟諷するに、常に闇中に彈指讚歎の聲有るを聞く」(T

五〇―四〇七b)とあるのは、讚歎の意。『統高僧伝』卷二〇・釈道哲伝、「清信士張暉なるもの有りて陪従すること多年にして請益供奉す。因に暫く山を下るに忽ち重雪に逢い、懸はそき路は既に擁かきがれ、七日にして方めて到る。哲は食具に對すると雖も、人の授くる無きが爲に、死を守りて念を正す。暉、雪を披ひきて菴に至りて彈指して覺悟せしめて、方めて定より起つ」(T五〇―五八九a)とあるのは、覺醒させるもの。『天聖広灯録』卷一五・風穴章、「精進大師、西天より來たる。師に問うて云く、覺人身は三つ、口は四つなり、師の懺悔せんことを請う。師乃ち彈指一下して云く、願わくば罪消滅せんことを、願わくば罪消滅せんことを」(Z二三五―三六九a)とあるのは、懺悔或は贖罪。『緇門警訓』卷九・登廁規式、「初めて廁に入る時、先に須らく彈指三下し、以て穢に在るの鬼に警しすべし」(T四八一―〇九二a)とあるのは、警告或は魔除けのまじない。『万善同歸集』卷下、「彈指して以て塵を去るを表わす」(T四八一―九九三a)とあるのは、去穢を表わす。『華嚴經』卷五九・入法界品、「爾の時、善財童子は、敬いて彌勒菩薩を遶り、合掌して白して言わく、唯だ願わくば大聖よ、樓觀の門を開き、我をして得入せしめよ。爾の時、彌勒菩薩は即ち右指を彈ずるに、門は自然に開く。善財即ち入る。入り已りて還た閉ず」(T九一七八〇b)とあるのは、菩薩の威神力を示すものであろう。また馬祖以後の禪では、仏性の全体作用の一つの表われであり、宗乘の端的な呈示である。『中華伝心地禪門師資承襲図』、「洪州の意とは、起心動念、彈指動目、所作所爲、皆な是れ佛性全體の用にして、更に別の用無し」(Z二一〇―四三三d)、『雲門広録』卷中、「師一日云く、拈槌豎拂、彈指揚眉、一問一答、並な向上の宗乘に當らず」(T四七―五五九a)。ここでは「向誰説」とあるから、「言外之旨」の端的として使われていよう。「言外之旨」を誰に説いたものか。

○去住〓この世を去ることと住まること、生死・生滅に同じ。『臨濟録』示衆、「若し眞正の見解を得れば、生死に染まず、去住自由なり」(T四七―四九七b)。

○春風掃殘雪 春風が吹けば残雪は融けて消えるように、人の死もそれと変わらないことをいう。

○典拠について 嘉靖十年智異山鐵窟開刊本は『禪苑聯芳』と明記する。「八〇」の「典拠について」の注に述べたように、現在逸書となっている。王随の注で挙げた仏教側の文献は全てこの話を含む。いま『禪門宝蔵録』とよく一致している『普灯録』卷二二・王随伝をベースにして異同を示すと、次のように全く同じである。

丞相王隨居士、嘗謁首山省念禪師、得言外之旨。自爾踐履益深、竟明大法。至臨終日、書偈曰、畫堂燈已滅、彈指向誰説。去住本尋常、春風掃殘雪。(Z一三七—一五四b)

### 〔八二〕 曾學士會

曾學士會、字同之。幼與雪竇顯禪師同舍。及冠異途、顯祝髮爲僧、公擢科第。一日會于景德寺。公遂引中庸大學、參以楞嚴符宗門語句質顯。顯曰、這介尚不與教乗合、況中庸大學乎、學士要徑捷理會此事。乃彈指一下、但恁麼薦取。公於言下領旨。

\*

曾學士會、字は同之。幼くして雪竇顯禪師と舍を同じくす。冠に及んで途を異にし、顯は祝髮して僧と爲り、公は科第に擢みさず。一日、景德寺に會う。公は遂に中庸大學を引き、參はかるに楞嚴の宗門に符するの語句を以て顯に質す。顯曰く、「這介しやこは尚お教乗と合せず、況や中庸大學をや、學士は徑捷に此の事を理會せんことを要もとむならば…」。乃ち彈指一下すらく、「但だ恁麼に薦取せよ」。公は言下に於て旨を領ず。

翰林学士曾会、字は同之で、幼いころから雪竇重顕禅師と、同室で育った人。成人してコースを分ち、顕は剃髪して出家するが、公は国試に合検した。ある日、景德寺で相遇すると、公は中庸・大学の典を引き、楞嚴経まで加えて、宗門の語句にかさね、（これでどうかと）顕につきつけた。

顕、（宗門の）ポイントとは、経典とかさならぬ、まして中庸・大学をや、学士（そなた）が手っとり早く、ポイントをものにしたいのなら。

ここでボンと指を一つはじいて

ただ、これをのみこむこと。

公は言下に、把んでうなずいた。

\*

\*

○曾學士會 〓『宋詩記事』卷四の略伝にいう、「曾會。會の字は宋元、泉州晉江（福建省晉江県）の人なり。端拱二年（九九九）、進士第二。光祿寺丞由り宣州（安徽省）に知たり。祥符末（二〇一六）、三司判官由り出でて兩浙轉運使と爲る。仁宗朝、刑部郎中、集賢殿修撰を以て明州（浙江省）に知たり」。雪竇重顕との関係については、治平三年（一〇六六）呂夏卿撰する「明州雪竇山資聖寺第六祖明覺大師塔銘」に次のようにいう、「師（重顕）は（廬山林禪師の道場を）辭して、池州景德寺に往き首座となり、衆のために肇法師の般若論を解く。知州の曾公會、果子を以



て地に抵<sup>いた</sup>つて曰く、古人云く、當處を離れず、常に湛然と。即今は何許<sup>いすこ</sup>にか在る。師は景德長老を指ざして曰く、只だ此の長老も也た落處を知らず。曾公云く、上座知るも也た過<sup>とが</sup>なきを得ず。師曰く、明眼の人は瞞<sup>ま</sup>じ難し。師は杭州に南遊し、蘇州洞庭の翠峰に住持し、智門に嗣ぐ。未だ幾ばくならずして曾公出でて明州を守る。手疏して師を請じ、雪竇資聖に住持せしむ（T四七―七二b）。五山版『雪竇語録』に、曾会の「雪竇開堂語録并序」「請住雪竇疏」が収められている。池州景德寺で、重頭は杭州靈隱珊禪師への推薦状を貰ったが、曾会が兩浙転運使となつて赴任し、靈隱寺に重頭を来訪したとき、書状をふところに蔵して衆中に陸沈し、識る者がなかつたという（『禅林僧宝伝』卷二、Z一三七―二四四c）。仏教側の資料である『普灯録』卷二二、『五灯会元』卷一六、『仏法金湯篇』卷一一、『居士分灯録』卷上、『先覚宗乘』卷三の専伝は、皆な幼くして重頭と同舎であつたとするが、重頭は四川の人であり、曾会は泉州の人である。また字を同之とするのも外典の資料と一致しない。「学士」とは、『瀑泉集』に「集賢殿学士曾公讚」（T四七―六九七b）があり、集賢殿学士のことであり、高官碩儒のものへの称号。唐の開元中に置かれ、経籍を刊緝し、佚書を搜求するのを掌る。

○雪竇顯禪師 九八〇―一〇五二。諱は重頭、字は隱之、姓は李氏、宋の太平興国五年（九八〇）四月八日、遂州（四省省潼川府遂寧県）に生まれる。咸平中（九九八―一〇〇三）に父母を亡くし出家する。蜀を出て、襄陽（湖北省）石門山の蘊聡（九六五―一〇三二）に参ずること三年、その指示で随州（湖北省随県）智門光祚に参じて開悟し、五年留止した。他に大陽警玄（九四三―一〇二七）にも参じた。廬山、池州景德寺、杭州靈隱寺、万寿寺を経て、天喜三年（一〇一九）蘇州洞庭の翠峰に出世した。天聖二年（一〇二四）に明州の知事に赴任した曾会（『宝慶四明志』卷一）の請疏により雪竇資聖寺に移った。曾会の他に『天聖広灯録』の編者である李遵勗とも交遊があつた。雪竇に住すること約三十年、度する僧七十八人、皇祐四年（一〇五二）六月一〇日入寂す。俗寿七十三、僧夏五十。

雪竇重頌の語録としては、『雪竇洞庭録』『雪竇後録』『雪竇瀑泉集』『雪竇拈古』『雪竇頌古』『雪竇祖英集』『雪竇開堂録』『雪竇拾遺』がある。『雪竇拾遺』を除いた残りの七集を雪竇七部集といい、編集は生前に始まり、北宋の刊本があった。『大正大藏經』巻四七には『明覺禪師語録』として、七集のうち頌古一卷を除いた残りのものがまとめられている。頌古は「四部叢刊」統編（集部）に、『雪竇拾遺』は『祖庭事苑』巻四に語句の註釈が収められている。

伝記資料としては、『天聖広灯録』巻二三、『統灯録』巻三、『聯灯会要』巻二七、『禪林僧宝伝』巻一一、『林間録』巻上、『五灯会元』巻一五、『仏祖歴代通載』巻一七、呂夏卿の撰する『明州雪竇山資聖寺第六祖明覺大師塔銘』がある。論文には永井政之「雪竇の語録の成立に関する一考察（一）（二）（三）」（駒沢大学大学院「仏教学研究会年報」六、七、八号、一九七二～四年）、柳田聖山「雪竇頌古の世界」（『禪文化研究所紀要』第一〇号、一九七八年）がある。

○同舎＝同じ家に住む。『大明高僧伝』巻五・釈心道伝、「年三十にして得度し、成都に詣り、唯識を習い、自ら以て至れりと爲す。同舎の僧、之に詰とうて曰く、三界唯心、萬法唯識。今目前萬象縱然たり、心識は安いずこにか在る。道は茫然たり」（T五〇一九一八b）。

○景德寺＝池州（安徽省貴池県）の景德寺。『大明一統志』巻一六、「景德寺は府治の北に在り。舊名は祝聖。唐の貞觀の間に建つ。宋の景德の初めに額を賜う」。

○中庸大學＝書名。共にもと『礼記』中の一編。『中庸』は、孔子の孫であり、曾子を師とする子思の思想を述べたものと伝承されるが、荀子の時代に原型ができ、秦始皇帝の時期に完成されたらしい。人間の至道としての中和と、その実現のための至誠を説き、その誠こそ、天命としての性に他ならぬとする。『大学』は、作者については異説

が多く定説を見ず、その成立も戦国末期から漢の武帝のころの間と推定されているだけではつきりしない。明德と親民と至善（三綱領）を目的実践する治者或は大人が行うべき実践過程、即ち格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下（八条目）を説く。六朝より唐代は仏教・道教が世に優位を占めていたが、韓愈「原道」は、堯・舜以来の聖人の道を闡明し、「大学」の八条目を根拠に道・仏を排撃し、李翱『復性書』は仏教を取り入れて「中庸」の誠・性の解釈に新生面を開き、宋代儒学の展開を導く。統一と平和が恢復された宋代になると、儒学尊重の風潮が広まり、天聖五年（一〇二七）、新しく進士に登第したものへ、御書の「中庸」が下賜されたのが恒例となり、「大学」「中庸」などが新登第者に下賜されるようになった。二程子（明道・伊川）は、『礼記』より「中庸」「大学」を表章し、『論語』『孟子』と並ぶ儒教の経書とし、朱子はそれを合して四書とし注解を著わしてより、大いに世に行われることとなった。赤塚忠「大学解説」「中庸解説」（新釈漢文大系『大学中庸』、明治書院）参照。

○楞嚴Ⅱ『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行楞嚴經』十卷。大唐神龍元年（七〇五）、中天竺沙門般刺密帝が広州制止道場で訳出したとするが、『華嚴經』『法華經』『維摩經』『般若經』等の多くの大乘經典を参照して作られた中国撰述經典。如来蔵思想を根幹に据え、本来の真心を見失ったありようを回復する神呪という方法論を合体した他に類例のない經典であり、唐代には禪者が断片的に句を引用するだけで、その流行を見なかつたが、宗密の著述や延寿の『宗鏡録』の流行によって普及した。北宋代には、長水子濬（？—一〇三八）は華嚴の立場から、孤山智円（九七六—一〇二二）・浄覚仁岳（九九二—一〇六四）は天台の立場から、覚範慧洪（一〇七一—一一二八）は禪の立場から、各々注釈書をものしている。荒木見悟「『楞嚴經』解説」（仏教經典選<sup>14</sup>『中国撰述經典』二、筑摩書房）参照。

○這介Ⅱここでは宗門を指す。つまり禪の本旨・根幹。「介」については〔三四〕「這介」の註を見よ。

○理會⇨解る、理解する。『伝灯録』卷二四・保寿匡祐禪師章、「僧問う、如何なるか是れ爲人底の一句。師曰く、口を開けば耳に入る。僧曰く、如何が理會せん。師曰く、人に逢えば人に告げよ」(T五一一四〇六a)。

○彈指一下⇨禪の本旨の直示であり、言詮不及の当体を端的に呈示するもの。「八一」「彈指向誰説」の注を参照。

『伝灯録』卷一二・陳尊宿章、「問う、以の字にも成らず、八の字も不是、是れ何の章句ぞ。師、彈指一聲して云く、會すや。云く、會せず。師云く、上來の表讚は無限の勝因なり。蝦蟇は跳ねて梵天に上り、蚯蚓は走りて東海を過る」(T五一一九二b)。「祖堂集」卷一九・資福和尚章、「問う、如何なるか是れ一路涅槃門。師は彈指一下し、却て展手す。(僧云く)如何が領會す。(師)云く、是れ秋月は明ならざるにあらざるに、子自ら八九に横行するのみ」(五一一二)。貫休「書石壁禪居屋壁」の詩、「赤き旃檀塔六七級、白き菡萏の花三四枝。禪客相い逢うて只だ彈指するのみ、此の心能く幾人の知るもの有らん」(『全唐詩』八三七)。

○薦取⇨ものにする。『五灯会元』卷八・龍濟紹修章、「初心にして未だ道に入らずんば、鬧浩浩なるを得ず。鐘聲裏に薦取するも、鼓聲裏に顛倒す」(Z二三八一—五四c)。

○典拠について⇨嘉靖十年智異山鐵窟開刊本は『禪苑聯芳』と明記する。但しこの書は逸書となっている。曾会の注に仏教側の資料として挙げたものは、この話を収める。いまその中で最も古い資料となる『嘉泰普灯録』卷二一・曾会章をベースにして『宝藏録』との異同を示すと次のようになる。

修撰會<sup>①</sup>會居士。幼與雪竇重顯禪師同舍、及冠異途。天禧間值於淮甸、公<sup>②</sup>遂引中庸大學、參以楞嚴符宗門語句質顯。顯曰、這箇<sup>③</sup>尚不與教乘合、況中庸大學耶、學士要徑捷理會此事。乃彈指一下、但恁麼薦取。公於言下領<sup>④</sup>旨。天聖初公守四明、以書幣迎師、補雪竇。(Z二三七一—五四c、d)

大字は共通する文字、小字は『普灯録』にのみ見える文字。

- ①曾十（學士）十會十（字同之）（宝蔵） ②（顯祝髮爲僧、公擢科第。一日會于景德寺）十公（宝蔵）  
③箇ニ介（宝蔵） ④耶ニ乎（宝蔵）

〔八三〕 李資玄居士

海東清平山眞樂公李資玄居士。看雪峰語録、至曰盡乾坤是沙門一隻眼、汝向什麼處蹲坐、公於言下、豁然大悟。

重修文殊院記

\*

海東清平山の眞樂公李資玄居士。雪峰語録を看み、盡乾坤は是れ沙門の一隻眼、汝は什麼處に向おいてか蹲坐す、と曰うに至りて、公は言下に於て、豁然と大悟す。

重修文殊院記

\*

海東（高麗）清平山の眞樂公と申す、李資玄居士は、雪峰語録をよんで、次の一条にゆきついた。

天地のすみずみまで、すべて修行者の同じ目の中にある。君たちは何処に、しゃがみこんでいるのか。

公は言下に、忽然大悟した。

\*

○清平山 江原道春川郡にあり。『重修文殊院記』に依れば次のようである。

もと慶雲山といい、高麗光宗二四年（九七三）に後唐よりやってきた永賢禪師が寺を建て白巖院と名づけた。文宗二二年（一〇六八）李公顛が春州道監倉使となったとき、慶雲の勝境を愛して白巖院の旧址に寺を建て普賢院とした。李公顛の長男である李資玄が官を棄てこの地に隱居したとき、山名を清平山、寺名を文殊院に改めた。

○李資玄 一〇六一—一一二五。『高麗史』卷九五に次のようにいう。

資玄、字は眞精。容貌魁偉にして、性は聰敏なり。登第して大樂署丞となる。忽かに官を棄て春州清平山に入り、文殊院を葺い、これに居る。疏食布衣にして禪道を以って自ら樂しむ。睿宗、内臣を遣わし、茶香金帛を賜い、累詔しこれを徵さんとす。資玄曰く、「臣、始め都の門を出ては復たび京華を踐まざることを誓う」と。敢えて奉詔せず、上表して曰く、「鳥を以って鳥を養えば、庶も鐘鼓の憂なく、魚を觀て魚を知れば、俾も江湖の性を遂ぐ」と。王、これを覽て致すべからざることを知り、南京に幸し、其の弟なる尚書の資徳をして行在に赴かんことを諭さしめ、詩を作り手書して賜う。資玄、召しに赴く。王曰く、「朕、此の老道徳を慕うこと久し。宜しく臣禮を以って見ゆべからず」と。上殿して拜せしめ坐を賜い、從容として與に語る。命じて三角山清涼寺に留め、再見して養性の要を問う。對えて曰く、「寡欲を善しとすることなかれ」と。遂に心要一篇を進む。王、歎賞し、待遇すること甚はだ厚し。既にして固く山に還らんことを請う。乃ち茶湯道服を賜い、以って其の行を寵む。仁宗即位し、亦た傾嚮す。疾ありて内醫を遣わし診視せしめ、茶藥を賜う。卒年六十五。性は吝、多く財貨を畜え、舉物積穀し、一方、苦を厭う。眞樂と賜諡さる。

また『重修文殊院記』に依れば、号は希夷子、『雪峰語録』を讀みて大悟し、『首楞嚴經』を重視した。宣和七年（一一二五）の寂。『追和百楽公樂道詩』一卷、『南遊詩』一卷、『禪機語録』一卷、『歌頌』一卷、『布袋頌』一卷の著述があつた。忽滑谷快天『朝鮮禪教史』は、『破閑集』巻中を引くに言う、「清平山に入り、文殊院を葺いて以て之に居し、尤も禪説を嗜む。學者至れば則輒ち之と幽室に入り、竟日危坐して言を忘じ、時時に古徳の宗旨を擧して商量す。是れ由り心法海東に流布し、惠照（鼎賢）・大鑑（坦然）の兩國師、皆な其の門に遊ぶ」とあり、九山禪門の入唐帰国僧以来の教外別伝の禪を復興した。

○雪峰語録Ⅱ雪峰義存（八二二—九〇八）の語録。元祿一五年（一七〇二）に覆刻された流布本（続藏本の底本）の付録としてある王随撰「福州雪峰山故真覚大師語録序」と孫覚の「雪峰真覚大師広録後序」に依れば、王随は故雪峰真覚大師語要一軸を出版したいという雪峰山の僧のために序を一〇三三年に書いており、この時に語録が出版された。

また孫覚は福州に知事として赴任し、雪峰山に語録を索めたが散乱漫滅し、わずかにしか残っていないため、王随の序を付す語録などを旁搜博採して編集し、『雪峰真覚大師広録』を元豊三年（一〇八〇）に出版した。李資玄が看んだものは、孫覚により再編された『広録』であろう。現在流布本の他に、孫覚の『広録』をかなり正確に承け継ぎ、成化二〇年（一四八四）の刊と推定される『雪峰広録』上下二巻本が、静岡県焼津の旭伝院岸沢文庫に所蔵されている。鈴木哲雄「雪峰に関する資料の検討」（『禪研究所紀要』四・五合併号）、椎名宏雄「『雪峰広録』と『雪峰紀年録』」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第一四号）。

○盡乾坤は沙門一隻眼、汝向什麼處蹲坐Ⅱ尽大地は自己の清浄心に他ならない、不浄をたれるような汚染されたところなどない。黄檗『宛陵録』の「三千世界は都來て是れ汝が箇の自己」（『禪の語録』8）一一八頁、筑摩書房）、長沙景岑の「盡十方世界は是れ沙門の眼、盡十方世界は是れ沙門の全身」（『伝灯録』巻一〇、T五一—二七四a）を承け

て展開されたもの。『雪峰広録』巻上に見える。「師垂語して云く、盡大地は是れ沙門の一隻眼、汝等諸人は什麼處に向いてか屙す」(Z二一九―四七五d)。「僧、西山和尚に問う、如何なるか是れ祖師西來的の意。山、拂子を擧して之を示す。其の僧肯わず、禮拜して出で去る。後に師に參ず。師問う、什麼處より來たる。僧云く、浙中より來たる。師云く、今夏は什麼處に在り。僧云く、蘇州西山。師云く、和尚は安んずや。僧云く、來たる時萬福なり。師云く、何ぞ且く從容たらず。僧云く、佛法明らめず。師云く、什麼の事が有る。僧、前話を擧す。師云く、汝は作麼生か他を肯わざる。僧云く、是れ境なり。師云く、汝、蘇州城裏の人家の男女を見るや。僧曰く、見る。師云く、汝、路上の林木を見るや。僧云く、見る。師云く、凡そ人家の男女、大地の林沼を觀るは、總て是れ境、汝還た肯うや。僧云く、肯う。師云く、祇だ拂子を拈起するが如きは、汝作麼生か肯わざる。僧乃ち禮拜して云く、學人取次に言を發せり、師の慈悲せんことを乞う。師云く、盡乾坤是れ箇の眼、汝什麼處に向いてか蹲坐す。僧無語」(Z二一九―四七八c)。「重修文殊院記」では、「盡乾坤是箇眼、汝向甚處蹲坐」とあつて、後段の句にほぼ同じである。「蹲坐」は、うづくまることで、屙(糞をする)を上品に言っただけ。

○重修文殊院記 金富轍撰、坦然書、祖遠立石『真樂公重修清平山文殊院記』のこと。『東文選』卷六四、『朝鮮金石總覽』〔九八〕に収められている。『東文選』を底本としてその全文を挙げると次のようである。

清平山文殊院記 金富轍

春州清平山者。古之慶雲山。而文殊院者。古之普賢院也。初禪師永賢。自唐來于新羅國。至太祖即位之十八年歲在乙未。新羅敬順王納土。是時後唐清泰二年也。至光廟二十四年。禪師始來于慶雲山。創蘭若曰白巖禪院。時大宋開寶六年也。至文廟二十二年歲在戊申。故左散騎常侍知樞密院事李公顛。爲春州道監倉使。愛慶雲勝境。乃即白巖之舊址置寺。曰普賢院。時熙寧元年也。其後希夷子。棄官隱居于茲。而盜賊寢息。虎狼絕迹。乃易山名曰清



平。又再見文殊<sup>⑤</sup>。咨決法要。乃易院名曰文殊。而仍加營葺。希夷子即李公之長男。名資玄字真精。容貌瑰偉。天性恬淡。元豐六年登進士第。至元祐四年。以大樂署丞。棄官逃世。行至臨津。過江自誓曰。此去不復入京城矣。其學蓋無所不窺。然深究佛理。而偏愛禪寂。自稱嘗讀雪峰語錄云。盡乾坤是箇眼。汝向甚處蹲坐。於此言下豁然自悟。從此以後。於佛祖言教。更無疑滯。既而遍遊海東名山。尋訪古聖賢遺迹。後遇<sup>⑥</sup>慧照<sup>⑦</sup>國師。住持山隣華岳寺。往來諮問禪理。居山唯蔬食衲衣。以儉約清淨爲樂。院外別洞。構間燕之所。其庵堂亭軒。凡十有餘處。堂曰閨性。菴曰見性。曰仙洞息菴等。各有其名。日以逍遙於其中。或獨坐。夜艾不寐。或坐盤石。經日不返。或入定見性菴。七日乃出。嘗謂門人曰。吾窮讀大藏。徧閱群書。而首楞嚴經。乃符印心宗。發明要路。而禪學人未有讀之者。良可嘆也。遂令門弟閱習之。而學者寢盛。睿廟再命內臣等。以茶香金繪<sup>⑧</sup>。特加賜予。仍命赴闕。公不欲負過江初心。竟不奉教。政和七年。乘輿幸于南京。遣公之舍弟尚書資德。請赴行在。仍以親製手書詩一首賜之曰。願得平生見。思量日漸加。高賢志難奪。其奈予心何。公上表辭之。而懇切不回。乃以其年八月。謁于南京。上曰。道德之老。積年傾慕。不可以臣禮見之。固命拜于殿上。上亦答拜。既坐進茶湯。從容說話。仍命暫止于三角山清涼寺。上乃往返。諮問禪理。公於是述進心要一篇。既而固請還山。乃賜茶香道具衣服。以寵其行。而王妃<sup>⑨</sup>公主亦以衣服。各致餽獻之禮。至宣和三年。尚書再奉王命。詣于山中。特開楞嚴講會。而諸方學者。來集聽受。四年今王<sup>⑩</sup>即位。特遣近臣李逢原。曲加存問。仍賜茶香衣物。七年公有微疾。遣內臣<sup>⑪</sup>醫問疾。兼賜茶藥等。公豫占安葬之地。一日謂門人曰。吾不久住。吾沒後。門人祖遠。繼住山門。自遠以後。亦擇有道行者。相繼爲主。是年四月二十一日。又謂門人曰。人命無常。生必有死。慎勿爲戚。以道爲懷。言訖申時入寂。臨終聰明不亂。談笑如平生。入寂時異香滿室。漸徧山洞。三日不歇。舉體潔白如玉。屈伸如平生。二十三日襄事並如遺教。自元祐四年。至宣和七年。住山已<sup>⑫</sup>二十七年。享年六十五。至建炎<sup>⑬</sup>四年秋八月。特賜諡曰真樂公。所著文章。有追和百樂<sup>⑭</sup>公樂道詩一卷。南遊

詩一卷。禪機語録一卷。歌頌一卷。布袋頌一卷。嘗試論之。自古高人隱君子多矣。大抵孤臣孽子。窮僻不遇者而後能之。又始則甘心於山林。終則降志辱身者有之。若夫王親勢家。而能終身於林下者。未之聞也。公以富貴之勢。又以文章取高。第登美仕。其入相而出將。如捨地芥耳。而棄富貴如弊屣。觀身世如浮雲。長往山中。不復京城。顧不異哉。又況公之族親。累世外戚。爲三韓之甲族。而公獨逍遙乎塵垢之外。而世累不及。德譽愈尊。豈特爲有識者咨嗟歎息而已哉。至於村野吠畝之氓。苟聞德風者。無不愛而敬之。蓋論人以忠。待物以信。而至誠感乎人神。此所以居山中。盜賊寢息。虎狼絕迹者歟。昔者梁鴻之入霸陵山也。可謂高士。然有孟光之俱隱。龐公之居岷山之陽也。未嘗入城府。然有妻子之携。豈若公忘情於嗜欲。放身於無何。恬淡高潔。味乎人之所不味。而始終無所撓。確乎高節。不爲勢遷移。凜然清風。常照人心膽。眞可謂高人隱君子。蓋古今一人而已。門人祖遠。以公行狀。請余爲記。其請勤勤。乃爲之記。而兼詳言公之終始本末如此。若夫清平山水洞壑之幽勝。實東方之美者。將以待能文之士賦之。此不及焉。<sup>21</sup>（『東文選』卷六四）

①賢<sub>ニ</sub>玄 ②敬<sub>ニ</sub>靜 ③四<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>東<sub>ニ</sub>、<sub>朝</sub>ニヨリ改ム ④二<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>東<sub>ニ</sub>、<sub>朝</sub>ニヨリ改シタ ⑤宜<sub>ニ</sub>冥 ⑥遇<sub>ニ</sub>週  
 ⑦照<sub>ニ</sub>炤 ⑧寢<sub>ニ</sub>浸 ⑨繪<sub>ニ</sub>繪 ⑩教<sub>ニ</sub>詔 ⑪而<sub>ニ</sub>十<sub>ニ</sub>（上意） ⑫止<sub>ニ</sub>至 ⑬妃<sub>ニ</sub>后 ⑭王<sub>ニ</sub>上 ⑮國<sub>ニ</sub>御  
 ⑯已<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>凡<sub>ニ</sub>三 ⑰建<sub>ニ</sub>立 ⑱樂<sub>ニ</sub>藥 ⑲（然）十<sub>ニ</sub>大 ⑳高<sub>ニ</sub>孤 ㉑焉<sub>ニ</sub>十<sub>ニ</sub>（正義大夫國子監大司成寶文閣學士知制誥金富轍記。大宋建炎四年庚戌十一月日。門人靖國安和寺住持傳因沙門坦然書。門人繼住傳法沙門祖遠立石。門人大師知遠刻。）（校本は「朝鮮金石総覧」、<sub>東</sub>は「東文選」、<sub>朝</sub>は「朝鮮金石総覧」）

○典拠について『重修文殊院記』と名記されている。いま『真楽公重修清平山文殊院記』の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

希夷子即李公之長男、名資玄、字眞精。容貌瑰偉、天性恬淡。元豐六年、登進士第、至元祐四年、以大樂署丞、棄官逃世。行至臨津、過

江自誓曰、此去不復入京城矣。其學蓋無所不窺、然深究佛理、而偏愛禪寂。自稱嘗讀<sup>①</sup>雪峰語錄云、盡乾坤是箇眼、汝向甚處蹲坐、於此言下、豁然自悟<sup>⑥</sup>。從此以後、於佛祖言教、更無疑滯。

大字は共通する文字、小字は『重修文殊院記』のみにあるもの。

- ① (海東清平山眞樂公李資玄居士) + 讀 || 看 (宝蔵)    ② 云 || 至曰 (宝蔵)    ③ 箇 || 沙門一隻 (宝蔵)  
 ④ 甚 || 什麼 (宝蔵)    ⑤ (公) + 於 (宝蔵)    ⑥ 自 || 大 (宝蔵)

## 尼婆三則

### 〔八四〕無著道人尼妙總

無著道人尼妙總、年三十許、厭世浮休、脱去縁飾、咨參諸老、已入正信。作夏徑山、大惠升堂次、舉藥山初參石頭後見馬祖因縁。總聞、豁然省悟。惠復舉岩頭婆子話問之。總答偈曰、一葉扁舟泛渺茫、呈撓舞棹別宮商。雲山海月都拋却、贏得莊周蝶夢長。

寶燈録

\*

無著道人尼妙總は年三十許<sup>ばかり</sup>にして、世の浮休を厭い、縁飾を脱去し、諸老に咨參し、已に正信に入る。夏を徑山に作すに、大惠升堂の次<sup>おり</sup>、藥山初めて石頭に參じ、後に馬祖に見えし因縁を擧す。總聞いて豁然として省悟す。惠復た岩

頭婆子の話を擧して之に問う。總答うるに偈もて曰く、「一葉の扁舟渺茫に泛かべ、橈を呈し棹を舞して宮商を別かつ。雲山海月都て抛却するも、莊周蝶夢の長きをかちえ贏得たるのみ」。

寶燈錄

\*

無著道人、妙総尼は、三十歳のとしまわりで、俗世間の危さを嫌い、貴頭の装いをかなぐりすて、各地の老師をたずねて、しかと正信を得おわり、徑山で（出家の）夏をすごした。

大恵が説法するとき、葉山が始め石頭に学び、後に馬祖に参じた話を引くと、総ははたと気づく処があつた。

大恵は又、巖頭と一老婆の対話を引いて、（総に）きいた。総は次のような偈をつくつて、答えた、

一枚の芦のような小舟を、見はるかす大河の水にかへ、

オールさばきも鮮やかに鼻歌がひびく。

四面山話のことはみな忘れてしまつて、

後に残つたのは、ただ莊周と蝶の長い夢。

\*

○無着道人尼妙總ニ『投機伝』（逸書）を引く『人天寶鑑』（Z一四八一六九b）に依れば、その略伝は次のようである。元祐間（一〇八六―九四）の丞相蘇頌の孫女。十五歳のとき、人の生死に疑問を懐き、凝思して気づく所があつた。親の命に従つて西徐の許寿源に嫁いたが、世相を厭い、薦巖円禪師に参じ、江蘇・浙江の諸徳に遍ねく参叩し

た。寿源の官職によつて嘉禾（浙江省嘉興県）に移つたとき、たまたま大慧禪師が城に來たのを聞きて礼敬し、無著の道号を授かつた。明くる年、大慧の住する徑山に夏を過ごし、宴坐して忽ち契悟し、投機の偈を詠み、印可された。これより名は世に著われたが、久しく韜晦した後に尼となり、張孝祥（号安国、一二三―一七〇）の請により、平江府（江蘇省吳縣）資壽寺に出世した。紹興庚辰（一一六〇）、法弟の晝瑩撰する『羅湖野録』に跋を書いている。

『人天寶鑑』の他に『嘉泰普灯録』卷一八、『聯灯会要』卷一八、『五灯会元』卷二〇、『叢林盛事』卷上に略伝と問答語句を録す。大慧の「示永寧郡夫人」の法語に、徑山に一夏を過ごしたときの妙総の開悟について詳しく語られており（『大慧語録』卷三二、T四七―九〇四a）、『大慧年譜』には紹興八年（一二三八）の条に掛けてゐる。

蘇頌（一〇二〇―一一〇二）、字は子容、泉州南安の人。父の代に潤州丹陽（江蘇省）に寓居した。慶曆二年（一〇四二）の進士。元祐中に右僕射となり、中書侍郎を兼ねた。富弼は古君子と称え、韓琦と共に宰相を務め、ともに其の廉退なるを表された。紹聖四年（一一〇九七）、太子少師をもつて隠退した。『蘇魏公集』七十二卷がある。『宋史』卷三四〇、『東都事略』卷八九。

○浮休 || 生死のこと。『莊子』刻意篇第一五、「其の生や浮かぶが若く、其の死や休うが若し」。

○縁飾 || 表面の装いを飾ること。『史記』卷一一二・平津侯主父列伝第五二、「天子は其の行いの敦厚にして、辯論餘有りて、文法吏事に習れたるを察す。而るに又た縁飾するに儒術を以てせば、上は大いに之を説ぶ」。『史記素隱』にいう、「儒術を以て文法を飾ること、衣服の領縁有りて以て飾と爲すが如きを謂うなり」。

○正信 || 知訥『真心直説』真心正信にいう、「祖門の正信は前に同じきには非ず。一切の有爲の因果を信ぜず、只だ自己本來是れ佛にして、天真自性人人具足し、涅槃の妙體箇箇圓成し、他に求むるを假らず、從來より自ら備わることを信ぜんことを要すのみ」（T四八―九九九b）。

○徑山 浙江省余杭県の西北二八キロメートルにある山。『大明一統志』卷三八・杭州府にいう、「徑山は天目（山の東北の峰なり。路の天目に通ずべき有り、故に徑山と名づく。五峰周り抱き、奇勝特に異なり。唐の時、呉郡の僧法欽、此に至りて菴を結ぶ」。唐のとき法欽禪師（七一四―七九二）が初めて住庵し、大曆三年（七六八）勅により入内説法し、帰山するに当って、代宗より徑山寺の名を賜わった。咸通三年（八六二）鑑宗禪師（七九三―八六六、嗣塩官齊安）が入って復興し、得度の弟子である洪譚禪師（八一三―八九五、嗣瀉山靈祐）が継ぎ、武肅王錢鏐（八五二―九三二）の帰依を受けて盛大となった。以後は著名な禪者の住持がなく細々と続いていたが、紹興七年（一一三七）に大慧宗杲が住してより大伽藍となり、後に五山の第一となる。『徑山志』十四卷がある。

○大惠 一一〇八九―一一六三。大慧禪師宗杲、号は妙喜、諡号は普覺禪師。祖師の話題に頌を付したり代語や著語して評を加えることが北宋代に顕著になるが、遂に話頭に参究することによって祖師の悟りを追体験したり自己究明をはかる看話禪が起り、その大成者となる。疑團を起し一心に工夫することによって突破して大悟を得、その悟りの威力の絶大さを誇示し、現実の社会へ切り込んでいった。俗姓は奚氏、宣州（安徽省）寧国県の人。十六歳にして東山慧雲院の慧齊について得度し、翌年景德寺で受戒した。洞山道微に参じて曹洞の宗旨を承け、臨済下黄龍派の宝峰湛堂文準に参じた。政和五年（一一一五）文準示寂後は覺範慧洪（一〇七一―一二二八）や張商英らと交わり、宣和七年（一一二五）東京天寧寺に勅住した圓悟克勤（一〇六三―一一三五）に参じて大悟した。建炎三年（一一二九）圓悟は金との抗争を避けて故郷の成都に帰ったので、江西の雲門庵に留まること五年にして、福建の福州・泉州の地へ移った。紹興七年（一一三七）主戦論者の張浚（一〇九七―一一六四）の奏によって徑山能仁禪院に住し、法席二千を集めた。紹興十一年（一一四二）張九成（一〇九二―一一五九）のために昇堂説法した「神臂弓」が、金との和議を成立させた、時の宰相秦檜（一一〇九―一一五五）の政治を批判するものとされ、張九成に連坐して湖南省衡州

へ流罪となった。紹興二〇年（一一五〇）流罪地が広東省梅州に移り、風土病に悩んだ。紹興二五年（一一五五）秦檜が卒し、明くる年に罪を許されて阿育王山広利寺に住した。紹興二八年（一一五八）徑山に再住し、孝宗が帰依し、大慧禪師の号を賜わった。隆興元年（一一六三）八月一日示寂、世寿七十五、僧夏五十八。張浚撰「大慧普覺禪師塔銘」（『大慧語錄』卷六末に所収）、淳熙癸卯（一一八三）の序を持つ『大慧年譜』が伝記の第一資料。他に『聯灯会要』卷一七、『嘉泰普灯録』卷一五、『五灯会元』卷一九、『続伝灯録』卷二七、『僧宝正統伝』卷六、『大明高僧伝』卷五など。『大慧語錄』三十卷、『正法眼蔵』『大慧武庫』などの撰述がある。

○薬山初參石頭後見馬祖因縁Ⅱ『宗門統要』卷七の石頭章に依れば次のようである。「師因みに薬山問う、三乘十二分教は某甲粗あらまし知る。嘗て聞く、南方は直指人心、見性成佛なりと。實に未だ明了ならず。伏して望むらくは和尚、慈悲もて指示したまえ。師云く、與麼も也た得ず、不與麼も也た得ず、與麼も不與麼も惣て得ず、汝作いかん麼生。山、佇思す。師云く、子の因縁は此に在らず、江西に馬大師有り、子彼に往き去れ、應に汝が爲に説かん。山、彼に至りて前に准りて請問す。馬師云く、我れ有る時は伊をして揚眉瞬目せしむ、有る時は伊をして揚眉瞬目せしめず、有る時は伊をして揚眉瞬目せしむる者ぜ是、有る時は伊をして揚眉瞬目せしむる者不是。山は是に於て省有りて便ち作禮す。馬師云く、子は箇の什麼の道理を見るや。山云く、某甲、石頭に在りし時、蚊子の鐵牛に上るが如し。師云、汝既に是の如し、宜しく善く護持すべし」（東洋文庫所蔵宋版本、卷七の五丁左六丁右）。他に『聯灯会要』卷一九・薬山章、『五灯会元』卷五・薬山章、『円悟語録』卷一三、『正法眼蔵』卷中、『禅門拈頌集』卷九、『馬祖語録』等にも見えるが、『祖堂集』『伝灯録』などの古い資料にはない。恐らく曹洞宗を馬祖下の法系に取り込もうとする宋代禅宗の附会であろう。

○岩頭婆子話Ⅱ『宗門統要』卷八の巖頭章によって示すと次のようである。「師因みに沙汰の後、祇だ鄂州湖辺に於

て渡子と作り、兩岸に各の三板を挂く。人有て過度に板を打つこと一下す。師云く、阿誰ぞ。或るひと云く、那邊に過り去らんと要す、と。師は乃ち棹を舞して之を迎う。一日因みに一婆の一孩兒を抱き來たりて乃ち問う、橈を呈し棹を舞すことは即ち問わず、且く道え、婆の手中の兒は甚處より得來たる。師便ち婆を打ちて云く、婆は七子を生みて、六箇は知音に遇わず、祇だ這の一箇も也た銷い得ず。便ち水中に抛向す」（東洋文庫所藏宋版本、卷八の三十九丁左〜四十丁右）。他に『聯灯会要』卷二一、『五灯会元』卷七、『禪門拈頌集』卷二〇の巖頭章、『正法眼藏』卷下にも録されている。

○雲山海月都抛却〓雲山海月は深奥なる禪旨のシンボライズ。そんな夢のごときものを捨てて無一物となつても、結局は夢を見つづけるだけのこと。妙総は迷と悟、現実と夢を区別しない立場から、修証をなげうつて樂道の人として生きる岩頭を冷やかしている。「雲山海月」については『雪竇頌古』五三則の頌、「野鴨子何許なるを知らん。馬祖見來たつて相い共に語る。山雲海月の情を語り盡すも、依前として會せず還た飛び去る。飛び去らんと欲して、却つて把住す、道え道え」。

○贏得……〓詩語。「勝ち取つた、せしめたという積極的な語気ではなく、得たものといえは結局これだけだ」（『禪語辞典』）。杜牧「遣懷詩」、「十年一覺す揚州の夢、青樓薄倖の名を贏得たるのみ」。

○莊周蝶夢〓『莊子』齊物論第二、「昔者、莊周夢に蝴蝶と爲る。栩栩然として蝴蝶たり。自ら諭しみ志に適するか。周たるを知らざるなり。俄にして覺むれば、則ち蘧蘧然として周なり。周の夢に蝴蝶と爲りしか、蝴蝶の夢に周と爲りしかを知らず。周と蝴蝶とは、則ち必ず分有り。此を之れ物化と謂ふ」。夢も覺も差別なく公平な立場で見るとを寓話に託して語つたもの。

○典拠について〓智異山能仁庵刊本は『寶燈錄』と記しているが、『宝灯録』については不明である。智異山鐵窟開



刊本は『普灯録』として、『宝灯録』は『普灯録』を誤ったものであろう。今、『嘉泰普灯録』卷一八・無著道人妙総章をベースにして異同を示すと次のようになる。

平江府資壽尼無著道人妙<sup>①</sup>總、亟相蘇公頌之孫女也。年三十許、厭世浮休、脫去緣飾、咨參諸老、已入正信。作夏徑山、大慧<sup>②</sup>陞<sup>③</sup>堂次、舉藥山初參石頭後見馬祖因緣。總聞、豁然省悟。慧下座。不動居士馮公楫、隨至方丈云、某理會得適來和尚所舉公案。慧曰、居士如何。云、恁麼也不得、嚇囉婆婆訶、不恁麼也不得、噫哩婆婆訶、恁麼不恁麼總不得、嚇囉噫哩婆婆訶。慧舉似總。總曰、曾見郭象註莊子、識者云、却是莊子註郭象。慧見其語異、復舉巖頭婆子話問之。總答偈曰、一葉扁舟泛渺茫、呈撓舞掉<sup>④</sup>別宮商、雲山海月都拋却、贏得莊周蝶夢長。慧休去。馮公疑其所悟不根。後過無錫、招至舟中、問云、婆生七子、六箇不遇知音、只這一箇也不消得、便棄在水中、老師言、道人理會得、且如何會。曰、已上供通、並是詣實。馮公大驚。(Z一三七—一三六b)

大字は共通する文字、小字は『普灯録』にのみある文字。

① (尼) + 妙 (宝蔵)    ② 慧 || 惠 (宝蔵)    ③ 陞 || 升 (宝蔵)    ④ 掉 || 棹 (宝蔵)    ⑤ 羸 || 羸 (宝蔵)

〔八五〕 范縣君寂壽道人

范縣君夫人、號寂壽道人。在城都、參佛果。果教渠看不是心不是佛不是物是什麼、不得下語、不得開口、看來看去、無入頭、便覺悽惶。乃問佛果云、此外有何方便、令某甲會去。果云、有介方便、不是心不是佛不是物。壽於此有省。乃云、元來得恁麼近。

宗門武庫

\*

范縣君夫人、寂壽道人と號す。城都に在りて佛果に參ず。果は渠に「不是心不是佛不是物、是れ什麼ぞ」を看せしむるに、下語し得ず、口を開き得ず、看來たり看去るも入頭無し、便ち悽惶なるを覺ゆ。乃ち佛果に問うて云く、「此の外に何の方便か有つて、某甲をして會し去らしむ」。果云く、「介かゝの方便有り、不是心不是佛不是物」。壽は此に於て省有り。乃ち云く、「元來得かくも恁麼も近し」。

宗門武庫

\*

范県大守の夫人で、寂壽道人とよぶ女が、(四川の)成都で仏果老人に參じた。仏果は彼女に次の公案を与えた。心でもない、仏でもない、物でもない、何かだと、コメントできず、ものも言えず、テキストを読み尽して、入口がなくなつて、はじめてゾツとくる処。

そこで仏果にきいた、このほかに何か私をものにさせる、手がかりはないのか。

果、手がかりがひとつだけある、心でもない仏でもない、物でもないものだ。

壽はここでハタと気がついた、

何ということだ、こんなに近いのに。

\*

○范縣君夫人〓縣君は五品官の妻への封号。それに夫人という高位の封号を付けて呼ぶのは間違いであり、もとの典拠に「夫人」の字が無い以上、『宝蔵録』撰者のミスである。恐らく撰者は「范」を人の名と思い違いをしてしまつ

たのであろう。

『事物紀原』卷一・嬪御命婦部にいう、「縣君。武帝又た太后の微なりし時、金王孫の家に生まるる所の姉を封じて、修成君と號す。修成は漢の縣なり。此れ縣の君に封ずるの始めなり。……唐制に四品の妻を郡君と爲し、五品を縣君と爲す」。この人については、『嘉泰普灯録』卷一五、『五灯会元』卷一九、『統伝灯録』卷二八、『宗門武庫』に録されているが、本則の範囲を出ない。『普灯録』『五灯会元』に「發居歳久」とある。發は發（寡婦）のことであるから、早くに夫と死別して未亡人であった。克勤は崇寧の初め（一一〇二）、四十歳のとき郷里の彭州（四川省彭縣）に帰り、まもなくして郭知章の請により成都昭覺寺に出世し、政和の間に再び南遊するまで住持する。范景君が参じたのは、この時期のことであるのか、晩年に昭覺寺に再住したときのことであるのか決しがたい。「范」は県名、山東省寿張県西の黄河の北岸に当る。『大明一統志』卷二四・東昌府、「范縣は州の東北六十里に在り。本と春秋晉の大夫、士會の邑なり。漢は范縣を置き、東郡に屬す。……貞觀中に改めて濮州に屬す。宋金元は舊に仍る」。恐らくこの女性の故郷の地なのであろう。

○城都〓成都（四川省）のこと。『歷代法宝記』にも城都とある。成と城は音通。

○佛果〓仏果円悟克勤。〔六〇〕の「圓悟禪師」の注を見よ。

○有介方便〓「介」については、〔三四〕「這介」の註を見よ。

○不是心不是佛不是物〓『伝灯録』卷六・馬祖章に、「僧問う、和尚は爲什麼なにゆゑに即心即佛と説く。師云く、小兒の啼くを止めんが爲なり。僧云く、啼き止む時は如何。師云く、非心非佛。僧云く、此の二種を除きて、人來たらば如何が指示す。師云く、伊に向つて不是物と道わん。僧云く、忽し其中の人の來たるに遇う時は如何。師云く、且く伊をして大道を體會せしむ」（T五一—二四六a）とあり、この即心即佛・非心非佛・不是物を前提として導かれて

きた句。即心即仏の教条化に対する徹底した反定立であり、活撥撥に躍動する万物の根源を言語化することで固定（概念化）してしまふことへの警告。『伝灯録』卷二八「南泉語要」、「大徳よ、心を認め佛を認むる莫れ。設い認得するも是れ境なり。他に喚んで所知愚と作さる。故に江西大師云く、不是心不是佛不是物と」（T五二―四四五b）。また『同』卷八の伏牛章でも馬祖の語として引かれるが、『同』卷八の南泉章や『碧巖録』二八則、『無門関』二七則によって南泉の語として知られている。

○看來看去〓次々に見ていく、とことん参究工夫する。『大慧語録』卷二二「示妙心居士」の法語、「這の一步は進み難きと曰うと雖も、若し夙むかしより曾て善根の種子を種え得ば、只だ信得及の處に向いて看よ。看來たり看去りて、内に住する所無く、外に縁ずる所無くんば、覺えず知らずに布袋を打失せん」（T四七―九〇三a）。

○入頭〓悟りへの入口、糸口。『伝心法要』、「你如今一切時中、行住坐臥に但だ無心のみ學べば、久久にして須らく實なるべし。你在力量小なるが爲に、頓に超ゆること能わざれども、但し三年五年、或いは十年なるを得ば、須らず箇の入頭の處を得て、自然に會し去るべし」（『禪の語録』七七頁、筑摩書房）。

○元來得恁麼近〓なんだ、こんなにも近かったのか。「近」は「不是心不是仏不是物」がそのまま答えになるという近さ、親密さを言う。いくら探しまわっても見つからずに悲傷して安んぜざる心が、そのままそれだと気づいたのである。達磨と慧可の安心問答、「〔神〕光曰く、我が心未だ寧らかならず、乞う師よ、與ともに安んぜよ。師（達磨）曰く、心を將もち來たれ、汝が與に安んぜん。曰く、心を覓みむるも不可得なり。師曰く、我れ汝が與に安んじ竟れり」（『伝灯録』卷三・達磨章、T五二―二九b）。また馬祖と汾州無業の「未だ了ぜざる底の心即ち是れなり」の問答（本書〔三〇〕）を参照。

○典故について〓『宗門武庫』と明記される。『大慧普覚禪師宗門武庫』という。大慧が弟子たちに語ったものを参

学比丘の道謙が編録した。宋朝禪林逸話を集める。卷首に淳熙丙午（一一八六）の李泳の序がある。

いま『宗門武庫』の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

范縣君<sup>①</sup>、號寂壽道人。在城都、參佛果。果教渠看不是心不是佛不是物是什麼、不得下語、不得開口、看來看去無入頭、便覺悽惶。乃問佛果云、此外有何方便、令某甲會去。果云、有箇方便、不是心不是佛不是物。壽於此有省。

乃云、元來得恁麼近。（T四七—九五—a）

①君十（夫人）（宝蔵） ②箇||介（宝蔵）

### 〔八六〕 愈道婆

愈道婆金陵女也。市油糍爲業。常隨衆、參問瑯琊。瑯以臨濟無位真人話示之。一日聞、丐者唱蓮華樂云、不因柳毅傳書信、何緣得到洞庭湖。忽有省、以糍盤地投。夫傍睨云、儂顛耶。婆掌曰、非汝境界。往見瑯琊。瑯望之、知其造詣。問、那介是無位真人。婆應聲曰、有一無位人、六臂三頭努力噴。一擘華山分兩路、萬年流水不知春。 普燈録  
禪門寶藏録卷下

\*

愈道婆は金陵ひとの女なり。油糍うまを市を業と爲す。常に衆に隨いて、瑯琊に參問す。瑯は臨濟無位の真人の話を以て之に示す。一日、丐者の蓮華樂を唱えて、「柳毅は書信を傳えるに因らずんば、何に縁りてか洞庭湖に到るを得ん」と云

うを聞く。忽まち省有りて、糍盤を以て地に投ず。夫、傍睨して云く、「儻顛ずるや」。婆掌して曰く、「汝の境界に非ず」。往きて瑯琊に見ゆ。瑯、之を望みて其の造詣いたれるを知りて問う、「那介か是れ無位の真人」。婆、聲に應じて曰く、「一無位の人有り、六臂三頭努力して嘖る。華山を一擘して兩路に分かつも、萬年の流水春を知らず」。

禪門寶藏錄卷下

普燈錄

\*

愈道婆は、金陵の（高貴の）女である。町をまわって、油糍（揚げ餅）を売るのが仕事で、いつも市民のあとについて、瑯琊に参じた。瑯琊は臨済の、無位の真人の話を説いてきかせた、

ある日、ほがいが人が（次のような）蓮華樂を歌うのをきいた、柳毅の手紙なかりせば、洞庭湖にゆける縁など無かつたのに。

忽ち気付くところがあつて油糍の皿を地に投げた。

ほがいが人は、（彼女を）にらみつけた、

貴様、気でも狂つたか。

婆は、一掌を与えた、おまえの知つたことか、

瑯琊の処にかけつけた。瑯は待つていたように、その造詣を認めて、ききだした、  
何処が無位の真人か、

婆は言いかえした、

無位の真人がただひとり、六本の腕、三つの首をふりあげて、力の限りどなりあげる。華山をひよいと、二つにひきさいても、万年も流れつづける（黄河の）水に、春がきたとも気付かぬ。

\*

○愈道婆 本則の機縁によつて瑯琊永起禪師に嗣ぎ、世に知られるようになる。僧が門前を過ぎれば常に「兒兒」と呼びかけ、擬議すれば門を閉ざしたという。『羅湖野録』卷上にいう、「宣政の間（政和・宣和の間、一一一一—一二一五）、江淮は禪衲の淵藪たり。婆は是の時に、無孔笛を吹き、韻は青霄に出ず。遂に和を致す者旁乎（午）よりして至る。機縁の偈句は世に流布し、自ら賞音のもの有りて、其れ一唱して三嘆を爲す」（Z一四二—四九一c）。『羅湖野録』の他に『雪堂拾遺録』『嘉泰普灯録』卷一一、『五灯会元』卷一九に三・四の機縁語句を録す。道婆について詳しくは分ならず。在家における仏道修行の婦人のことか、行婆とどう違うのか、待考。

○油糍 〔四四〕の注を参照。

○瑯琊 永起禪師。襄陽の人、鷲嶺興化禪院に受業した。白雲守端禪師に参じ、その法を嗣ぐ。滁州（安徽省滁県）の西南十里にある瑯琊山の開化寺に住すこと二十年。熙寧初（一〇六八）に英宗の女祁国長公主の婿となつた張敦礼の婦依を受けた。『建中靖国統灯録』卷二〇、『五灯会元』卷一九に問答語句を録す。

○臨濟無位真人話 〔臨濟録』上堂（二三）の次の話を指す。「上堂。云く、赤肉團上に一無位の真人有り、常に汝等諸人の面門より出入す。未だ證據せざる者は、看よ看よ。時に僧有りて出でて問う、如何なるか是れ無位の真人。」

師禪床を下りて、把住して云く、道え道え。其の僧擬議す。師托開して云く、無位の真人是れ什麼の乾屎橛ぞ。便ち方丈に歸る」(T四七—四九六c)。

無位真人は自由人としての無依道人のこと。無位はどんなランク付けにもあてはまらぬありようをいい、当時の天子を頂点とした階級社会では破天荒な考えであるが、唐朝の衰えた唐末の華北では一種の地方独立政権ができ、地位や身分が流動的になり、一種の解放された雰囲気の中から生まれてきたものであろう。真人はもと莊子に見える道家の理想としての自由人の意。真人の語は古くより仏、解脱者の訳語とされたが、臨済の当時の河北では道教が盛んで、俗耳には入りやすいこの語を取り上げ、無位真人とすることで新鮮なひびきを持った言葉を創造した。しかし、臨済のこの端的な明示も、内在的超越者として誤解して受け取られ易かった。このように短絡的に理解された文脈に於て、長沙や玄沙は無位真人を批判する。入矢義高「玄沙の臨済批判」(『松ヶ岡文庫研究年報』第五号、一九九一年)。

○丐者||単なる物もらいではなく、一芸をもつて乞食する者のこと。『水滸伝』第四〇回、「只だ見る、法場の東邊に一夥いちだんの弄蛇へびつかいの的丐者の、強て法場裏うらに挨おし入りて看んと要すを」。

○蓮華樂||『漢語大詞典』「蓮花落」の項にいう、「蓮華樂とも称す。民間曲芸の一種。旧時には乞丐の唱える所なり。後に專業の演員が出現し、演唱者は一〜二人、僅かに竹板をもつて拍子をとる」。また『中国風俗辞典』「蓮花落」の項は、「蓮花樂、蓮花鬧、落子とも称す。漢族の民間説唱形式。全国の大多数の地区に流行す。演唱者は一〜二人。多くは竹板をもつて拍子をとる。其の唱白は一般に本地の方言、民歌の短調と結合し、各の特色がある。……旧時には日常の演出を除くの外、おお多くは春節の期間に在りて、丐兒或は芸人が門いたに登るに由つて演唱され、内容は多くはめでたい縁起のよいものであり、聞く者は錢や物を与える。現に江西蓮花落、紹興蓮花落等有り、広



西に在つては則ち零落と称す」(上海辞書出版社、一九九〇年)。

○柳毅傳書信Ⅱ唐の儀鳳中(六七六―七九)、儒生の柳毅は科擧に失敗して故郷の湘水(湖南省)に帰る途中、涇川の龍王の次男に嫁いでいた洞庭君の娘が虐待されているのに同情し、彼女の手紙を洞庭君に届けてその不幸を救い、宮殿に招かれて歓待を受け財宝を与えられたこと。唐の伝奇小説「柳毅伝」の話である。龍宮より戻って大富豪となった柳毅は、妻を二度娶ったが、二度ともすぐに死別し、三度目に未亡人の廬氏の娘を娶った所、龍女に似ていた。一年あまりで子を儲けると、妻は洞庭君の娘であると打ち明ける。柳毅は遂に神仙となり、南海に移り住んだという。『太平広記』巻四一九に収む。今村与志雄訳『唐宋伝奇集』上(岩波文庫、一九八八年)に現代語訳がある。

○忽有省、以糍盤地投Ⅱ諸人の面門より出入する無位真人の話は、真の自己に届けるための臨濟からのことづけであったことに気が付いた。たった今まで気付かなかった悔しさと、気付いたことの喜びで二重に気持が増幅し、餅皿を投げ割るといふ行為となった。「地投」は「投地」が正しい。

○非汝境界Ⅱ『仏本行集経』巻三六(T三二八二c)、『菩薩瓔珞経』巻二・五・一三(T二六一六b・三九c・一一〇c)等に見える。

○那介是……Ⅱ「如何是……」という問い方ではなく、なぜ「どれが…なのか」という問い方なのか。『碧巖録』八七則の垂示に、「明眼の漢には窠臼没し。有る時は孤峰頂上に草漫漫。有る時は鬧市裏頭に赤灑灑。忽ち忿怒の那吒の若く、三頭六臂を現わす。忽ち日月面の若く、普攝の慈光を放ち、一塵に於て一切身を現わし、隨類の人と爲りて和泥合水す。忽若し向上の竅を撥著せば、佛眼も也た觀著れず。設使い千聖出頭し來たるも、也た須らく三千里に倒退すべし」(T四八一―二二二a)とあるように、明眼の人の自在なありようを説示している。さあ、愈道婆よ、どの姿を現わして打って出るか。既に道婆の造詣深さを見て取ったうえでの問い掛け。「介」については「三

四)「這介」の註を見よ。

○應聲オウショウにすぐに応える。『林間録』卷下・道円禪師、「兩僧、百丈野狐の因縁を擧す。一僧曰く、只如たしえば不昧因果なるとも、也た未だ野狐身を脱せず。一僧、應聲して曰く、便ち是れ因果に落ちず、亦た何ぞ曾て野狐身に墮ちんや」(Z一四八―三二七d)。

○六臂三頭ロクベキサンダウ那吒太子が阿修羅となつて忿怒している形相。那吒は毘沙門天王の五太子中の一人で、護法護国の鬼神。しかし、那吒が三頭六臂の形相だという説は他に見られない。『法苑珠林』卷五に、「夫れ修羅道とは、此の一途に生まるれば、偏ひとより多くして諂曲、……形容は長大、恒に弊くろしみて飢虚うへたり、體貌は龕鄙にして毎に瞋毒を懷く。稜層そびえたちて畏るべく、擁尊として人を驚かす、並びに三頭を出し、重ねて八臂を安じ、山を跨ぎ海を踏み、日を把り雲を擎つかぐ」(T五三―三〇八b)とあり、三頭八臂の阿修羅が言及されている。『五灯会元』卷一四・石門元易章、『同』卷一八の泗州用元章には「八臂の那吒」と言われている。『伝灯録』卷一三・汾州善昭章、「如何なるか是れ主中の主。師曰く、三頭六臂にして天地を擎げ、忿怒の那吒、帝の鐘を撲なげつ」(T五一―三〇五a)。また前掲の『碧巖録』八七則の垂示を参照。

○一壁華山分兩路イツペツカフニリウロ華山は陝西省華陰県南にある山。もと華山に阻まれて黄河は東流できなかつたが、巨靈河神が華山を二つに分け、黄河を東流させたという伝説をふまえる。三頭六臂の無位人の大機大用に喩う。張平子「西京賦」の薛綜の注に引く古語にいう、「此れ本と一山にして、當に河水之を過ぎんとして曲行す。河神は手を以て其の上を撃開し、足もて其の下を踏み離し、中分して二と爲し、以て河流を通ず。手足の跡、今に尚お存せり」(『文選』卷二)。また『祖庭事苑』卷一「巨靈」の項にいう、「郭縁生の『述征記』に云く、華山は首陽と本と一山なり。河神巨靈、撃開して河流を通ず。故に掌迹存せり」(Z一三三―一四a)。『雪竇頌古』三三則は臨濟の大機大用を

頌していう、「斷際の全機後蹤に繼がれ、持ち來たること何ぞ必ずしも從容に在らん。巨靈手を擡もたるに多子無く、華山の千萬重を分破す」（『禪の語録』九六頁）。「分兩路」は、路を北宋の行政区画の意とし、山が河東路と京北路の兩路に二分された意に取る。首陽山は山西省永濟県に在り、河東路に属し、華山は京北路に属している。「壁」は底本では「壁」に作るも、訂正した。

○萬年流水不知春〓無位真人の三頭六臂の働きによつて山が二つに割れ、悠久に流れる苦難の黄河に春がめぐつてきたけれども、無位真人は一向に知りもしない。ただ無心に働いているだけ。そのことを象徴的に言つたものだろう。○典拠について『普灯録』と明示されている。いま『嘉泰普灯録』卷一一・愈道婆章をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

愈道婆金陵人①也。市油②爲業。常隨衆、參問瑯琊。瑯以臨濟無位真人話示之。一日聞、丐者唱蓮華樂云、不因柳毅傳書信、何緣得到洞庭山③。忽大悟④、以⑤餐盤投地。夫傍睨云、儂顛耶。婆掌曰、非汝境界。往見瑯琊。瑯望之、知其造詣。問、那箇⑥は無位真人。婆應聲曰、有一無位人、六臂三頭努力噴、一壁⑦華山分兩路、萬年流水不知春。由是聲名⑧顯著。凡有僧至、則曰、兒兒。僧擬議即掩門。佛燈珣禪師往勸之。婆見如前所問。珣云、爺在甚麼處。婆轉身拜露柱。珣即踏倒云、將謂有多少奇特。便出。婆曰、兒兒來、惜你則箇。珣竟不顧。安首座至。便問、甚處來。云、德山。曰、德山泰乃老婆兒子。云、婆是甚人兒子。曰、被上座一問、直得立地放尿。安休去。嘗頌馬祖不安因緣曰、日月面、靈光閃電、雖然截斷天下衲僧舌頭、分明只道得一半。（乙一三七—九五c）

大字は共通する文字、小字は『普灯録』のみに見える文字。

- ①人〓女（宝蔵）
- ②②餐盤〓投地（宝蔵）
- ③山〓湖（宝蔵）
- ④大悟〓有省（宝蔵）
- ⑤投地〓地投（宝蔵）
- ⑥箇〓介（宝蔵）
- ⑦壁〓壁（宝蔵）